
Lon ely Plan et

スカフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o n e l y P l a n e t

【Nコード】

N 2 2 5 6 B

【作者名】

スカファイ

【あらすじ】

死んだはずのリウちゃんがボクの前に現れた。ボクはただ嫌な予感がしていた。*この作品は『summer visit』との関連作品です。

000
プロローグ

ザ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ー
ツ

キキツ

激しく雨の降る中、

一台のタクシーがボクの住むマンションに停まった。

「……お客さん……」

⌋
⋮
⌋

[illegible]

「お客さん！着きましたよ！起きて下さい！」

$$\vdots \quad \vdots$$

運転手さんが困った顔をして酔ったお客さんに声を掛けた。

「着きましたって！1640円になります！」

「…ん…あ…もう着いたのか。
…ったく…まだ雨止まないのか…いくらだっけ？」

「１６４０円になります。」

お客さんは半分寝ぼけた顔でお札を運転手さんに差し出した。

「………２０００円からの預かりで３６０円のおつりですね…
凄い雨ですから足元滑らない様にね…」

「…ははは…わかってる…少し酒入ってるけど、
まだまだそこら辺の若い者には負けないぜ！」

ザアアアアアアアアア

ドアが開く。

「あんがと。またいつか…」

お客さんは鞆を自分の頭の上に乗せ、傘代わりにして走り出した。

「…ありがとうございます…」

ボタン

タクシーのドアが閉まる。

運転手さんはいざ出発しようと思前を見た。

「…………ん？」

雨が降りしきる中、奥に人影らしきモノが見えた。

ザアアアアアアアアア

「…………あれって…………子供だよ…………な？」

運転手さんは目を凝らしながらよく見たが、
やはり子供が奥に立っている様に見える。

「…………なんでこんな雨の中……………」

ザアアアアアアアアア

「……………」

ドン…ドンドン…！

いきなり助手席の窓を叩く音がしてびっくりする運転手さん。

窓を見るとさっきのお客さんが窓を叩いていた。

「…うおっ…ったくなんだよ…」

ザアアアアアアアアア

ドン！ドン！ドン！

先ほど降りる時と打って変わって険しい表情をしながらしつこく窓を叩いている。

「そんなに叩かなくなつて…今開けますよ…」

運転手さんはボタンを押し窓を開けた。

「…どうしたんですか？」

ザアアアアアアアアア

「…はあっ…はあっ…」

客の男は息を整えると先ほど来た場所を指しながら口を開いた。

「……………あそこに……………子供が……………」

「……………子供？」

「……………はあっ……………ああ……………入口の横に子供が倒れて……………はあっ……………はあっ……………多分……………死んで……………」

「……………え！？……………」

運転手さんは『子供』と聞いて、
さっき前方にいた子供の事を思いだし、前を見た。

「……………。……………」

ザアアアアアアアアッ

だが、そこには誰もいない。

「……………いない……………」

「……………はあっ……………ちょっと運転手さん聞いてる？……………早く……………警察を呼ばないと……………はあっ……………それと救急車も……………はあっ……………はあっ……………」

お客さんは雨に濡れながらも冷静を装おうとしていたが見るからに動揺を隠せてない。

それを見た運転手さんは我に返り、

「……………あ…ああ。」

携帯をすぐに取り出し電話をした。

「…もしもしっ」

ザアアアアアアアアッ

それは凄く雨の降った夜の出来事だった。

「セイちゃん!!」

「セイちゃんってば!!」

「起きて!セイちゃん!!」

「……んん」

その翌日、ボクはママに起こされたんだ。

「……んん……なにママ？……まだ起きる時間じゃないよ……んん」

「いいからっ！落ち着いて聞いてよっ……」

リュウちゃんが……リュウちゃんが死んじゃったっ！」

「……え？」

ボクはゆっくりと身体を起こした。

ママは真剣な顔してボクを見つめ、また言ったんだ。

「……リュウちゃんが……」

死んじゃったの……」

「……え？」

「……ベランダから落ちて……死んじゃったの……うううううっ」

ママは目から涙をたくさん零しながらボクを抱きしめた。

「…リュウちゃんが……………死んだ？」

「…そうよ」

『死んだ』？

…『死ぬ』ってどういう事なんだろう？

ボクはふと、そう思った。

そしてボクはママに抱き着かれながらゆっくりと視線を窓に移した。

「……………」

窓の向こうからこっちを見ていた。

…リュウちゃんが…。

そして、微笑んでいる。

死んだはずのリュウちゃんが立っていた。

001 リユウ セイ

ザアアアアアアア

「セイちゃん！遅れちゃってごめんね…！」

「ママ遅いよ！雨も降って来るし…」

「ごめん。道混んじゃって…」

今日はめずらしくママが学校まで迎えに来てくれた。

普段は送迎バスで帰ってるボクには

少しでもママといれる時間が増えるのは素直に嬉しかった。

ザアアアアアアア

「ねえ…ママ…」

「…ん？なあに？」

「あそこ…」

ボクは大きな木があるトコを指差しながら言った。

「…？ あそこがどうかした…？」

「…見えない？」

「見えないってなにが…？」

ママは首を傾げながらボクを見つめた。

ザアアアアアアーツ

「……………」

やっぱり…見えないんだ。

「うつん。なんでもない。」

…それよりも…
なんでそこにいるんだろう。

リュウちゃん、

一週間前に死んだはずなのに…。

ザアアアアアーツ

「それにしても今日はよく雨降るわね…」

「…うん。確か…こんな大雨だったね…」

「……なにが？」

「リュウちゃん…死んだの…」

「…………。」

ママはボクの言葉に口を閉じた。

「……どうして、ベランダから落ちたの？」

「……セイちゃんも知ってるでしょ？
リュウくんは脳に障害があったから……」

ブウウウウウーン

「だから死んだの？」

「……そうよ。」

きつとリュウくんはベランダから落ちてても
死ぬとは思わなかったんでしょうね……」

「…………。」

『死ぬとは思わなかった』？

『死ぬ』とはナンだろう？

ボクはママを見つめた。

ザアアアアアアーツ

「死ぬってどういう事…?」

「天国に行っちゃうって事よ。

肉体が滅びるといっか…

あゝ子供に言ってもわかんないか…。」

…わかるモン。

わかるけど…

ザアアアアアアーツ

「天国に行けない人っている?」

「地獄に行く人?」

「…うん。地獄にも行けない人…」

「なに、それ？」

「…だから…ずっとここにいる人。」

「幽霊って事？…さあ…ママ見えないからねえ…」

ブウウウウウーン

「ねえ…ママ…リュウちゃんって…」

「セイちゃん！もうリュウくんの話はやめて。
それにリュウくんのお父さん、お母さんの前では
リュウくんの話はあまり話しないで…」

「…どうして？」

「だって思い出したらまた悲しくなるでしょ…？」

「…悲しい？」

「そ。寂しくて悲しくなるのよ…」

「寂しくて？」

ザアアアアアアアッ

…さっき雨に濡れていたリュウちゃんも寂しそうだったな…

…でも違う…

ママもカン違いしてる。

リュウちゃんは確かに死んじゃった。

でも…そこにいる。

そこにいるんだ。

寂しいだけじゃなく、

…悲しくて…

…哀しくて…

ザアアアアアアア

「セイ…ちゃん？どうしたの？静かだね…」

黙るボクに不安を感じたのか、ボクを見つめていた。

「…ママ…前…」

「え？」

ママが前を向くと、

雨が降りしきる道路の奥に小さな子供が立っていた。

「きゃっ。」

驚いたママが思いっきりブレーキを踏むと、

車は叫び声のような音を立てて停まろうとする。

キイイイイイーツ！！

…あれはリュウちゃんだ！

「キヤアアアア…ッ」

笑ってる。

リュウちゃんが笑ってる。

楽しそうに笑うリュウちゃんはただ不気味だった。

「……ケケケ……」

001 リユウ セイ（後書き）

お久しぶりです！
よかったら感想ください！
励みになります！

002 アメ ャム マタ フル

「奥さん…大丈夫ですか？」

「あ、はい。」

「ま・幸いケガ人はいないし…車もキズ一つない。
ラッキーな事故でしたね。」

「あの、ホントにケガ人はいないんですか？」

「ええ。子供を轢いたみたいな事言っていましたよね？
でも目撃した人達によると最初から誰もいなかったみたいですよ。
奥さんが急にブレーキを踏まれた…」

「そんな！だってはつきりと！」

「さっきまで大雨でしたからね！。そのせいじゃないですか？」

「…？ ホントに誰もいなかったんですよね？」

「ええ。奥さんの見間違いですよ。」

警察の人がそう言うとママは凄くほっとした表情をして

「そうですか。」

「…もう行っていていいですよ。」

「はい。どうもお騒がせしました。」

車で道路を走っていたら目の前に突然、リュウちゃんが現れた。

ママはびっくりして急ブレーキを踏んだんだけど、それが間に合わずリュウちゃんを轢いた気がした。

でもリュウちゃんは幽霊だ。

そんな事をしても死ぬはずがない。

だって死んでるからね！

ママはよくわかってないみたいだ。

ボクは車の助手席でママがこちらへ歩いて来るのを見て安心した。

ガチャッ

ボタン。

「セイちゃんごめん。車で待たしちゃって…」

「…うつん。」

「帰ろうか。」

「うつん。」

ブウウウウウーン

「……………」

「警察の人はなんて？」

「ママの見間違いつて。最初から子供なんていなかったって。」

「……………」

「雨のせいかな？きっとママが見間違えたのね…」

ブウウウウウーッ

「ーいたよ。」

「え!？」

ブウウウウウーッ

「…いたって…子供が？」

ママは運転しながらボクの顔を見た。
ボクはママを見つめ返すと冷静に

「うん、そう。リュウちゃんが。」

「……セイちゃん、ママも子供には見えただけ、
リュウくんには見えなかった。
だってリュウくんは亡くなったのよ?
いるワケないじゃない。」

ママは前向きを変え少しキツイ口調で言った。

「……そうだね。なんでボクには見えるんだろう。」

「……………」

「ボク……あんな顔初めてみたよ。」

「あんな顔？」

「さっき……リュウちゃんが車の前に立ってた時……笑ってた。」

「……………」

「ボク……リュウちゃんが笑ってるトコあまり見た事ないよ……」

「……確かにリュウくんは笑わない子だったわ。」

「だからさっきのはリュウくんじゃないね。」

「笑ってたからね……」

「ママは優しくボクに言いかけず、」

「さっきの子供がリュウちゃんだって認めたくないんだろう。」

「ーママ、ボクの話信じてないんだね？」

「…だって…幽霊なんて信じられないもの。
きつと寂しい心を作り出した幻よ。」

「寂しい心？」

「そうよ。」

セイちゃんはリュウくんが亡くなって寂しいのよ。
だから見えるのよ。」

「…そっか。」

ボクは移り変わる窓の景色を眺めた。

ブウウウウウーン

車はボクン家があるマンションへと着いた。

ボタン。

「ふう。ママ疲れちゃった。」

ママは家に着くなりソファに体重を預けた。

「ボク、先にフロ入っていい？」

「そうね。セイちゃん少し濡れてるから。」

ボクは着替えを取りに自分の部屋へと入る。

ガチャッ。

今日は朝から雨模様なので電気をつけないと部屋は真っ暗だった。

カチッ。

薄ぐらい部屋が明るくなる。

ボクはゆつくりと窓を見る。

さつき止んだばかりの雨はまたシトシトと降り始めていた。

「……。」

ボクは窓に近づき、外の景色をながめる。

そして、この窓からは隣の家のベランダが見える。

そのベランダにはいくつかの花が置いてあつて

リュウちゃんはよく、花に水をやっていた。

そう、隣はリュウちゃんの家で、

リュウちゃんはここ6階のベランダから落ちたのだ。

ボクは考える。

ここから下に落ちる瞬間、

リュウちゃんは何を思い、

感じたのだろうか…と。

そして、人は死んだらどうなるんだろうか…と。

003 フンスイ

ボクはダンスから洋服を取り、風呂場へ向かう。

スタスタスタ。

その途中、

ママがキッチンで何かを作ってる姿が見えたが何も言わず歩いた。

ガチャッ

ボタン。

ドアを閉めると目の前に洗面台と鏡があつて
そこに自分の姿が映し出されていた。

「……………」

ボクはしばらく眺めていたが、どうしても良くなって服を脱ぎ始めた。
全部脱ぎ終わると風呂場のドアをゆっくりと開けた。

モワッ…

白い湿気混じりの煙がボクを包む。
そのお陰で視界は真っ白になった。

まるで雲の世界みたいに。

カタッ

中に入るとママが用意していたのか、
湯舟にたくさんのお湯が入っていた。

ボクはそれを確認すると蛇口をひねり、シャワーからお湯を出す。
いつもシャワーは最初は冷たい水が出るので
自分の反対側に向けて勢いよく噴射させる。

シャアアアア。

それを眺めていると昔の事を思い出した。

シャアアアアアアア

あれはいつだったっけ…？

シャアアアアアーツ

リュウちゃんと公園で水遊びをしたんだ。

噴水のある公園で

リュウちゃんは基本的にあまりしゃべらないから、
ずっとボクの横でウロウロしてるだけだった。

ボクは砂場で夢中になって山を作り、
それにトンネルを作る作業に追われていたんだ。
結構時間かかったと思う。

「出来たっ…！」

ボクはやっとトンネルが開通したので思わず大声で喜びを表現した。
もちろん、それをリュウちゃんにも見せたくて後ろを振り返る。

「リュウちゃん見て！」

だが、リュウちゃんは後ろにはいなかった。
後ろどころか、右、左、前にも姿はない。

「リュウちゃん…？」

ボクは体を…視界を…360°廻す。

だが、そこにはリュウちゃんの姿は見当たらなかった。

「リュウちゃん…どこ？」

ボクは必死になって探した。

「リュウちゃん…！」

その時

リュウちゃんのママに『しっかり見ててね…』
と、念を押された風景が何回も頭を過ぎった。

タッタッタッタ

「はあ…はあ…」

ボクは一生懸命走った。

住宅街にある公園だからそんなに大きくはないけど、小さいボクには広く感じた。

もしかしたら…その時だけだったかも知れない。

「…はあっ…はあっ」

どんなに走っても走ってもリュウちゃんには追いつけなかった。

「…リュウちゃん…」

ボクは泣きそうになった。

泣きそうになって足を止めると声が聞こえた。

その声がリュウちゃんの声だとすぐにわかった。

そして奥にある噴水の前にリュウちゃんの姿があった。
ボクはリュウちゃんに歩み寄った。

「みて…」

リュウちゃんはボクを見るなり、
噴水の中の水を指差しながら言った。

「……はあっ…はあっ」

ボクはリュウちゃんを見つけた安心感でいっぱいになり、
また泣きたくなった。

「見て。」

リュウちゃんがまた言うので、
ボクはリュウちゃんの言われるまま噴水の水を見た。

そこには自分の顔が映っているのが見えた。
噴水の水が落ちて来る振動で水面が揺れ、
映っている自分の顔が歪む。

リュウちゃんはそれを不思議そうに見ていたのだ。

「見て…面白い…」

リュウちゃんは楽しそうにポツリと言った。
だけどボクはリュウちゃんを探すのに疲れ、

「…リュウちゃん…もう帰ろうか…」

と、溜息混じりに言った。

さっきあんなに一生懸命に作った『山のトンネル』の事も
ボクの頭にはもう無かったのだ。

バシヤッ

リュウちゃんが笑いながらボクに水をかけた。
ム力ついたボクはすぐにやり返す。

「あゝ！やったなあ！」

バシヤシヤッ。

するとリュウちゃんもまたやり返す。

バシヤッ。

「あはっ」

ジャババジャ。

「あつ…やったなあ！」

バシャシャシャ。

メビウスの輪のようにそれを繰り返すと、
雨でも降ったかのように2人ともビショビショになった。

もちろん、家に帰ればママやおばさんにはびっくりされ、怒られた。

シャアアアアアアア

「……………」

あの時のリュウくんはまだマシだった。

まだ普通だった。

あの事さえなければ…。

004 オキニイリ ノ バシヨ

ボクはポンプからシャンプーを数量手に取り、頭を洗う。
もちろん目に入ると痛いので目を閉じる。

「……………」。

- ある日、
リュウちゃんが突然、いなくなった。

リュウちゃんのママは必死に探していたけど、
ボクには何となく何処にいるかすぐにわかった。
ボクは急ぎ足でその場所へと向かった。

例の噴水のある場所。

あれ以来、
リュウちゃんにとってはお気に入りの場所だった。

「はあ…はあ…」

そして、その場所が見えて来た。

「…やっぱりいた…」

リュウちゃんは噴水の水の中を相変わらず覗き込んでいた。

「リュウちゃん！」

大声でリュウちゃんを呼んだ。

その時…

ドボン！

「…………え？」

リュウちゃんはボクの声にびっくりして水の中に落ちたのだ。

「あゝ！ あゝ！」

“バジャッバジャッ”

リュウちゃんは手足をバタバタさせ、溺れていた。

「…………。」

「あゝうゝぐうぼっげっ」

“ジャバジャバジャバ”

「…ぐっぼっぐっん」

“バジャッバジャッバジャゴボッゴボボっ”

…ボクはウンザリしていた。

「…はあ。」

ボクのあとを楽しそうについてくるリュウちゃん。

ボクがいなけりゃ何も出来ないリュウちゃんに。

今だってホラ、足がつくような場所で溺れているじゃないか。

何やってるんだよ。

「あゝ！ あゝ！」

“バジャジャボビヤツビチャツビチャ”

リュウちゃんは手足を微妙な感覚でバタバタさせ、目は必死に助けを求めている。

「ボクを見ていた。」

「……………」

それでもボクは動かなかった。

「あゝ…… あ……」

“ バジャッボジャッジャ

バジャバ……バジャ……ジャ……”

「ああっ……あ……ぶ……ぶ……」

“ …… チャボッ……”

「……………」

“……………」

しばらくすると、何も聞こえなくなった。

リュウちゃんの声も

水の音も。

「……………」。

ボクはゆっくりと後ろに振り返る。

そして、家に向かって歩き出した。

その間、何だか無性におかしくなって笑いを堪えきれなくなった。

「……………」

「……………」

ボクは両手で口を押さえ、急ぎ足で歩く。

あのリュウちゃんから解放される事は

こんなに身が軽くなるのか、今にも叫びたかった。

「セイちゃん！」

後ろでリュウくんのお母さんの声が聞こえた。

「……………!？」

ボクはゆっくりと後を振り返った。

「ねえ！リュウがどこにいるかわからない？
セイちゃんならわかるはずよ……！」

「……………。」

「ホントは知ってるんじゃない？」

「……………。」

「ねえ！知ってるなら教えて！」

「……………知らない。」

ボクが強くそう言つとリュウちゃんのママは肩を落とし、

「……………そう。わかった、ありがとう。」

トボトボとまた何処かへ探しに行った。

「……………」

「……………」

「……………」

ボクは急いで家に帰り、自分の部屋へ入るなり笑った。

「あはははははは………」

何故か凄く気持ち良かったから。

開放感がボクを腹の底から笑いをくれたのだ。

「あーはっはっはっはっ」

それから数分後、リュウちゃんは噴水で発見された。

命は助かったが、更に障害を悪化させた。

きつとリュウちゃんはボクを許せないんだ。

ボクに復讐して殺すつもりなんだ。

だからホラ、死んだ後もボクにくっついてるじゃないか。

シャアアアアアアアアー

…気付けば、ずっとシャンプーで頭を洗っていた。

ボクはシャワーを手探りで探す。

「…え」と…」

目を閉じてるので見えない。

ガシッ！

その瞬間、誰かがボクの腕を掴んだ。

「……！」

ボクは恐る恐る目を開けた。

視界には笑っている口が目に入る。

リュウちゃん？

そう思った時、その口が大きく開いた。

005 サビシイコエ

シャアアアアアアア

「……………」。

目の前には

口を開けているリュウちゃんがいた。

ボクは動けなかった。

シャアアアアアアア

その頃、キッチンにいたママは
いつもより風呂が長いボクを心配し始めていた。

「風呂長いわね。どうしたのかしら?」

コン コン

「セイちゃん…大丈夫? ねえ…!」

「……………」

コン コン

「聞こえてるー?」

「……………」

返事のないボクにママは不安になり、
ドアノブに手をつける。

シャアアアアアア

「セイちゃん？」

ドアを開けた。

ガチャツ。

シャアアアアアア

「……………」

中からは湯気とシャワーの音だけが響いてる。

「セイちゃん！」

そしてママの目には湯舟に浮かんでるボクが目に入った。

「きゃっ！セイちゃん…！」

ママはボクの身体を湯舟から持ち上げる。

「セイちゃん！どうしちゃったの！？」

「…ママ…」

「…はっ！？」

「この子…ボクじゃないよ…」

「セイちゃん？」

ママは風呂場の端っこに座っているボクを見て驚く。

「…え？じゃあ…」

ママはゆっくりと抱きかかえている子供を見下ろす。

「…この子は…？」

抱き抱えてる子供を見てびっくりした。

「……ひっ」

そこには笑っているリュウちゃんがいた。

「きゃあああーっ！」

ママは叫びながらリュウちゃんを放した。

その勢いでリュウちゃんは頭から落ち、鈍い音が風呂場に響いた。

ゴン。

「……………」。

シャアアアアアアア

ボクもママもリュウちゃんから目が離せなかった。
…というより動けなかった。

「……………」

「……………」

「…いタイよオ」

リュウちゃんは頭を押さえながらうつずくまっていた。

「セイちゃん！早く立って！」

ママは動けないボクの身体を掴み言った。

「…うん…」

ボクはゆっくりと立ち上がり、
ママに引っ張られながら風呂場から出ようとした。

シャアアアアアア

ガシッ。

リュウちゃんがボクの足を掴む。

「…あのときモタスけてくれなかったね…」

「…え？」

「セイちゃん早く！」

ママは勢いよくボクを引っ張ると
リュウちゃんの手はボクの足から離れ、
リュウちゃんの言葉を聞く暇もなく、ボクは風呂場から出た。

ボタン。

「はぁ…はぁ…」

「……………」

「…今の…リュウくんだったよね？」

ママはボクに確認するように言った。

「うん。」

ボクは冷静に返事をした。

「…な…なんで？だってリュウくんは…
ベランダから落ちて…ううん…だってお葬式だったし…
火葬もして…あるはずがないわ…リュウちゃんの肉体は…」

ママは必死に頭を整理しようとしていた。

ボクは濡れた身体のままだったのですごく寒かった。

「…ママ…寒い…」

「あ、ごめん。今タオル持ってくる。」

ママが立ち上がるうとした時、ドアの向こうから音がした。

ガチャ ガチャ

「……！」

ドアのノブが右や左に動いている。

「だめ！」

ママはノブが回り切らないように手で固定した。

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

「…ひい」

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

ボクは何故か冷静だった。

必死でドアを押さえてるママを見ても恐怖はなかった。

「…アケテ…」

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

「…あけて…」

ガチャ ガチャ ガチャ

ガチャ ガチャ ガチャ

ドアの向こうから声がする。

「アケテ…」

リュウちゃんの寂しそうな声はずっと止まらなかった。

「セイちゃん！勝手にあまり動かないでっ！！」

ママがボクを呼び止めるが、
寒いのが苦手なボクはそんな良い子で居られなかった。

「大丈夫だよ！」

ママを無視して部屋へ向かうボク。

「セイちゃん！」

ガチャッ

ドアを開けると部屋は湿気でジメジメしていた。

「…あ。」

タンスの横の窓のカーテンがかすかに揺れている。

「……？」

いつの間に窓が？

とは思ったが、気にせずにダンスへ向かった。

タッタッタッタ

カタッ。

ダンスからパンツ、ズボン、シャツ…を取り出し、着る。
ボクはすぐに窓を閉めようと窓に近づくと隣のベランダが目に入る。

リュウちゃんのママが用事から帰って来たばかりなのか、
慌てて洗濯物を入れていた。

「……………」

「セイちゃん！」

背後からのママの声にボクはびっくりした。

「もう！アンタはなんで勝手に動くの！
そこにいときなさいって言ったでしょう！？」

「だって寒かったんだもん！」

「もう…連れて行かれたのかと思った。」

「え？ボクがリュウちゃんに？」

「そうよ！リュウくんにはアンタしか友達いないでしょう？」
「
そう言ってママはボクを抱き締めた。」

「……………」

リュウちゃんは…
ボクを友達と思ってないよ。

だって

ボクも友達と思ってないもの。

でもママには、ボクがリュウちゃんに殺されても、『友達』だから寂しくて

一緒に天国に連れて行かれたと思うんだろうな…。

リュウちゃんがボクを怨んでるなんて
思ってもいないんだろうな…。

「大丈夫よ…セイちゃん。
ママが守ってあげる。だから心配しないで…」

「……………」

ママはギュッとボクを抱き締める。
それが気持ち良くなって…ボクはふと目を閉じる。

「…………ママ…」

「…ん？」

「この事はリュウくんのパパとママに言わないでね…」

「…え？なんで？」

ママはキョトンとした目でボクを見る。

「…絶対…言わないで」

ボクは冷静に強く言った。

「…わかった。

今は…言わないでおく…」。

でも今度あなたに何かあったら言うわよ？」

「…うん。」

ボクはニコリと笑ってママに抱きついた。
ママはボクの髪をやさしく撫でる。

ゆっくりとまた目を閉じる。

…もしかしたら…

ボクが作り出したかもしれない。

リュウちゃんはとくに死んでて

ボクが『黄泉がえらした』かもしれない。

…だから…神様…

ボクが目を開けるまでにリュウちゃんを天国に帰して下さい。

リュウちゃんにやった事は反省してます。

…だから…

…だから…

リュウちゃんを天国に帰して下さい。

ボクは祈りながら眠りについた。

夜中。

…かすかに音が聞こえる。

あれはママがパソコンを打つ音だ。

パパが死んでからママはボクの為に仕事をしてる。
きつともう…真夜中だ…

なのにママはずっと仕事してる。

お疲れ様…

…ママ…。

現実と夢の区別がつかないボクは寝言でそう言った。

「ママ大好き。」

007 オトシモノ

翌朝。

嘘のように天気は晴れていた。

あまりの眩しさにいつもより早く目が覚め、ママに褒められた。
今日はいい日になりそう。…なんて勝手に思ったりもした。

「じゃっ…行ってくる…」

「ホントに今日…学校休まなくても大丈夫なの…？昨日の事もあるし…」

心配そうに言うママに、ボクは笑顔で、

「大丈夫だって！」

「いい！？リュウくんが学校に現れたら逃げるのよ…」

「しっ！隣のリュウくんのパパとママに聞こえちゃうよ！
じゃあ行ってきますー！」

元気なボクにママは逆に不安そうに見送った。

ボクは玄関から飛び出し、

エレベーターへと向かおうとした瞬間 -

ガチャッ

隣の家のドアが開いた。

「 - !」

ぬう

…とリュウちゃんのパパが出て来た。

リュウちゃんのパパはボクを見てニタアと笑い、

「おはよ…」

と、挨拶してきた。

「お…おはようございます。」

ボクはそのまま走った。

昔から苦手なんだ…リュウちゃんのパパ。

それはきっと…ボクにパパがいなせいなのだろう…。

「はあ…はあ…」

ボクはエレベーターを使わず、階段で下まで降りて行った。

その頃、ママは家でパソコンをいじっていた。

・仕事ではなく、リュウちゃんの件で…

「やだ。こんなにあるの…？
霊能者のサイト…。迷うなあ…」

ママはここに霊能者を呼んでリュウちゃんを成仏させるつもりだ。
リュウちゃんの幽霊を見たのは今でも半信半疑だろうけど、
きっと何もしないよりはマシと考えたんだろう。

「……はあ……はあ……」

ボクはやつと一階に着く。

その時、エレベーターの開く音が聞こえた。

ピンポン

ボクはエレベーターを見る。

ドアがゆつくりと開き、リュウちゃんのパパが立っていた。

「……………」

ボクはまた走り出す。

タッタッタッタ

ドンッ！

「うわっ！」

「きゃっ！」

ボクは誰かとぶつかった。

「ごめんなさい…大丈夫ですか？」

「…うん。うん。」

カッ カッ カッ カッ

リュウちゃんのパパの足音に怯えたボクは、

「ホントにごめんなさい！

ボク急いでいるので失礼します。」

「え！？…あ・ちよつと！」

タッタッタツ…

ボクは後ろを振り返ることなく、そのままダッシュした。

「…もう手帳落としてるの…気付いてないわ。」

「大丈夫ですか？」

「あ・ハイ。」

「おや、この手帳は…?」

「…あ…さつき、ぶつかって来た子が落としたみたいで…」

「うちの隣に住んでる男の子のだよ。
自分が届けてあげましょうか?」

「……………」

「…………? なにか?」

「…いえ、いいです。」

わたしもこの4階に用があるんで…

ついでに渡して来ます。

どうぞ、わたしに気遣わずお出かけになって下さい。」

「……………そうですか…では、失礼します。」

カッ カッ
カッ カッ
カッ カッ
カッ カッ

「……………」

「……はあ……はあ……」

ボクはバス停まで走った。
あと1分以内でバスは来るからリュウちゃんのパパに会う事もない。

「……………あれ!？」

ボクはどっかで手帳を落としたらしい。

「おかしいな…絶対ポケットに入れたはずなのに…」

ポケットをどんなに探しても見つからない。
考えられるのはさっきぶつかった時だろう。
でも、戻るのもいやだ。

…ブウウウ…

ちょうどバスがやって来た。

ボクは手帳を諦めてそのままバスに乗ることにした。

一方、さっきボクとぶつかった人は
エレベーターの中でボクの手帳を物色していた。

「なになに…ナカニシ…セイイチロウ…？」

「……17歳……」

「……養護学校……」

手帳を拾った女の方はボクの手帳をじっと眺めていた。

「……17歳か……」

008 ウシロ

ブウウウウウッ

ボクは毎日バスで学校へ向かっている。

そんなに遠くへ離れてるワケじゃにのに毎日バスだ。

正直バスは嫌いだ。

バスというより…このバスが嫌い。

ちよっとでも騒ぐと先生は怒るし規則がうっとおしい。

だから一度バスじゃなく歩いて行った。

距離的にはそんなに遠くないはずなのに。
全然学校に着けなかった。

どうしてだろう？

「セイちゃん…」

突然、後ろの座席からボクの名前を呼ぶ声がある。
その声に聞き覚えがあった。
ボクは固まった。

「リュウちゃん？」

「…決して後ろを振り向かないでね…」

「…うん」

「振り向いたら君は…死ぬ…よ…？」

「…絶対、振り向かないよ！神に誓って！」

「…ぷつ。『神様』なんていないよ、セイちゃん。
いたら、ボくら『障害者』なんて存在しないだろ？」

「……………」

「…そんな事より、君のママだよ。」

「ママが何か？」

「ボクを成仏させる為に…
霊能者をパソコンで探してるんだ。」

「……リユウちゃん…君は死んだんだ。
君はここにいちゃいけないんだ…ママがそう言ってた。」

「君は大人の言う事なら何でも信じちゃうのかい？
大人は嘘つきだ！
…それにボクにはやらないといけない事がある。」

「なにを？」

「決まってるだろ…君を監視する事さ！」

「ボクを…？」

「そう。だってボクら友達だよね？」

「何のために…？」

「…今にわかるよ。」

「……………」。

「だから君からもママに言ってもらえないかな？
今は探ほっというって…」

「君は…ホントにリュウくん？」

「なんでそんな事聞くの？」

「…だってリュウくんは…そんなに喋らないもん！
もつと無口な方だよ！君は…偽物だっ！
リュウくんを利用しているっ！」

ボクは我慢できず大声で叫んだ。
するとバスに乗ってるみんながボクを見る。

「どうしたの？セイくん…？」

このバスは養護学校の送迎バスなので先生が一人いつもいる。
その先生がボクを心配そうに声を掛けて来た。

「…何でもない。」

「何でもないワケないでしょう？あんな大きな声出して…」

「怖い夢見たんです」

「…まあ。」

先生はボクの頭を優しく撫でた。
すると突然、前に居た女の子がボクを指差し、

「ウソよ！起きてたよ！わたし見てたモン！
後ろを振り向くとか振り向かないとか…」

余計な事を言い出した。

「後ろ？後ろに誰がいたの？」

先生は後ろの席を見る。

「誰もいないわよ。見てみなさい。」

「…え!？」

さつきリュウちゃんが言ってた。
後ろを振り向いたら死ぬって!

「誰もいないって事を自分の目で見なさい」

「……いやだ。」

「どうして? ホラ見てみなさいよ。誰もいないのよ?」

「……見れない。」

「…どうして?」

先生は優しい声で聞いて来る。

でも、答えられるわけじゃないじゃないか。
リュウちゃんが言ってたなんて…。

「…だって見たら…」

「見たら?」

「あゝじれったい！」

前にいた女の子が突然先生を払いのけ、
ボクの体を掴み無理矢理後ろを向かせた。

グイッ

「あっ！」

ボクは無理矢理向かされたのでひねられた腰が痛かった。
そして後ろには誰も座って無かった。

「誰もいないでしょ？ばあゝか！」

「萌ちゃん！乱暴はいけません！」

「だってトロいモン！年上のクセに！」

「……………」

ボクは後ろを見てしまった。

するとボクを振り向かせた女の子が耳元で囁いた。

「振り向くなって言ったのに…死ぬよ？」

「え？」

009 バス

「ふり向いたら死ぬよ…?」

「え!?!」

「萌ちゃん!席について!」

先生が注意すると、

萌ちゃんはハツとしたような顔をして周りをキョロキョロした。

「……アレ!?!わたし何やってたの?」

「もう何ワケわかんない事言ってるの!ほら、座って……」

「…? うん……」

萌ちゃんは自分が何やってたのか全然きづいてないようだ。

ボクは萌ちゃんの体にリュウちゃんが乗り移ったんだと考えた。

「……………」

萌ちゃんは前の座席に戻った。
だが、後ろをふり返りボクを見ると何故かニヤリと笑った。

ブウウウウウーッ…

バスは学校へと走り出す。

カタ　カタ　カタ

「…なんかみんなピンと来ないわね。」

ママは霊能者サイトを見てるがなかなかこれといったのが見つからない。

アレがりゅちゃんじゃないとしても幽霊らしモノには違いない。
そう判断してサイトを探しまくっていた。

「…うん。」

ピンポーン

「…はあゝい。」

ガチャツ。

「……………どうも。」

ママがドアを開けるとそこには男の人が立っていた。
年齢はやや若く、とても頭良さそうな顔つきだ。
一瞬、押し売りやどこかの営業かと思ったが、
どちらにも当てはまらない雰囲気だった。

「……………？」

「突然ですいませんが、最近変わった事ございませんか？」

「…え!？」

「…超常現象みたいなものです。」

一瞬、何を言ってるのかわからなかったが、
少し考え、口を開いた。

「…それって…幽霊とか？」

「そうです！何か心当たりは？」

「はあ…まあ…」

さっきまでその関連サイトを見てただけに、
何ともいえない感じでママは返事をする。

その顔を見た男は胸ポケットから名刺を差し出した。

「あ・失礼。わたくしこういふものですが…」

「…超常現象研究家…ですか？」

「そうです。何となくお宅のドアから妙な気配を感じるんです…」

「うちからですか…？今も？」

「はい少し。誰か家族はいますか？」

「ええ。息子が一人。」

「もしかすると息子さんに憑いて行ってるかも知れません。」

「…うそ！？あの子は無事なんですか？」

「さあ。学校に行かれたんですか？」

「ええ。ちょっと電話で確認して来ます！」

ママは急いで学校に電話をかける。
男は家の中をジーツと眺めていた。

「着きましたよー。ゆっくり降りてね」

先生がそう言うともんな席から立ち上がり降りる準備をし、
前の席からみんな降りていく。

バスはいつもの時間に学校へ到着した。

「……………」

萌ちゃんはずっとボクの顔を見ている。

「何でボクを見るの？」

「…きやははは！」

萌ちゃんは突然、笑い出した。

「何がおかしいの？」

「きやはははは…」

「……………！」

ボクは黙ったままバスを降りようと席を立った。

「ダメ！あたしが先に降りるのっ！」

そう言っただけ萌ちゃんはボクをド突き、先に降りる。

「……………！！！」

ムカついたけど、意味がわからない。

「セイくん！何してるの？早く降りなさい。」

気付けばボクだけバスに残ってた。

「先生ー！」

外から声がすると

先生はバスから降りた。

「…なにー？」

ボクも先生の後について行くように降りようとしたその時、ドアが閉まった。

ボタン。

「……！」

ボクはドアを見てキョトンとする。

ゆっくり後ろを振り返ると運転手さんがこっちを見ていた。

「なんで閉めるんですか…？」

ボクがそう聞くと運転手さんは答えた。

「…なんでかな？」

ボクはいやな予感がした。

010 キョウシツ

「ボクを降ろして！」

「…降ろすさ。だから怖がる事はない…」

「怖がってないよ！ボクは知ってるよ！

運転手さんにリュウちゃんが乗り移ってるんだろ？
ボクを騙そうったってそうは行かないぞ！」

「……なるほどね。」

運転手さんはニヤリと笑うとドアを開けた。

ガチャッ。

「……！？」

「さっさと降りな。先生が来るぜ。」

「……………」

ボクは恐かったので　すぐに降りた。

ダッダッダッダッ…

そして教室へ走り出す。

その途中、ボクを見つけた先生が、

「…あ・セイくん！ママから電話よ。」

…と、ボクに言った。

「はい。」

ボクは先生の後に付いて行くと受話器を渡された。

『もしもし！？』

セイちゃん？無事なの？』

「うん…どうしたの？」

『今…家に幽霊に詳しい人が来てるんだけど…』

もしかしたらセイちゃんに付いて行ったんじゃないかって…』

ボクはその言葉に納得する。

「……うん…そうかも。」

でも最近からずっとボクの傍にいるし…ボクなら大丈夫だよ。」

冷静に受け止めてるボクにママは不安を隠せない。

『…やっぱり本物の幽霊なのかしら？
リュウくんはまだ成仏してないのね。』

「わからない。」

だってボクもおかしいもの…まともな人間じゃないから。」

『…セイちゃん…そんな事言わないで…ママ悲しい。』

「なんで？」

『……とにかく！何かあったら……ガチャン！』

「あ。」

電話を切られた。

ママにではなく、萌ちゃんに…

「いつまで電話してるの？年上のクセに…！
みんな教室で待ってるんだからね！」

「年上は関係ないだろ！？もう！」

「ママがいないと何も出来ないクセに！」

そう言つと萌ちゃんは走り出した。

「あ…待つてよ！」

ボクは必死に萌ちゃんを追いつけた。

だが、萌ちゃんは足が早くすぐに見えなくなった。

そして教室の入口が見え、ボクはドアを開けた。

ガラガラ…

バフッ。

ドアを開けた途端、ボクの頭に何かが当たった。
そして白い粉の様なものがいつせいに現れた。
その粉はボクの気管を苦しめた。

「…ゴホッ　ゴホッ…ゴホホッ！」

「…ふふ。」

「クスクス」

上から落ちてきたモノは黒板消しだった。
その光景を楽しんでる皆の声が聞こえる。

「…ゴホッ　ゴホッうえお！」

ボクがむせてると、萌ちゃんが近づいて来た。

「それくらい気付けよ！年上のクセに！ばあゝか！」

「クスス」

「きゃはは」

萌ちゃんの一言にみんな騒ぎ出す。
ボクは涙が出た。
咳が止まらなくて。

「ゴホッ！ゴホッ！ゴホッ！」

「…セイちゃん！

あなたはこの先まともに生きていけるのかな…？」

萌ちゃんがニヤけながら言う。
ボクは萌ちゃんを見つめた。

「彼女にリュウちゃんがいるのだろうか？」

「萌ちゃん！あなた何て事するの！？」

先生が窓から顔を出しながら言う。

「ゴホッ…先生…」

先生はゆっくりボクに近づいてくる。

「…ゴホッ！」

…グニ…グニユ…

「ああっ！」

ボクは叫んだ。

先生は何故かボクを踏んだのだ。

「こんなゴミを教室に入れちゃマズイでしょ！」

―そう言ったのだ。

「…先生！？」

すると萌ちゃんが笑い出す。

「きゃはは……」

先生も笑う。

「うふふ……」

そしてみんなが笑い出す。

「あはははは……」

ボクは啞然とした。

そして気付いたのだ。

この教室にいるのはみんなリュウちゃんだと。

そしてそこで目が覚めた。

「あれ？」

「セイちゃん！今は授業中よ？
寝てはいけません！」

「え？」

いつの間にか教室で寝ていた。

ボクはワケがわからず周りを見渡すと、みんながボクを見ていた。

「……………」

一体何処からが夢で、現実なんだろう？
ボクはただボツーとしていた。

「息子は無事だそうです。」

早退する様に言った方が良かったですか？」

ママはその得たいの知れない人に真剣にそう言った。

「……いや……実はわたくし、

これから行かないといけない用事ありますので、

何かあったらこの名刺に書いてある番号にお電話下さい……。」

男はそういつて名刺を差し出した。

「ママ丁寧なそれを受け取ると返事をした。

「はい」

「では……失礼します。」

ボタン。

「……………」

ママはパソコンに向かいながら椅子に座る。
そして名刺を見た。

「…ちょっと調べてみようかな？」

「……………」

ボクは震えていた。

教室のみんなにリュウちゃんが乗り移っているから…。

「セイちゃん！今の問題の答えわかる？」

先生が急にボクに質問をして来た。

「…え？」

「…まったく…人の話をちゃんと聞きなさいって言ってるでしょう！」

先生はボクに怒鳴りつける。

「…ぷつ。」

「くすくす」

笑い声が聞こえる。

ボクは声ができる方を見た。

そこにリュウちゃんがいる様な気がしたから…。

「……………」

…萌ちゃんと目が合った。

ニヤリとしたままジッとボクを見ている。

ボクは視線をそらしノートを見つめた。

「…セイちゃん！今の答えは…？」

「…え？」

「また聞いてなかったの？さっき言ったばかりでしょう…？」

「…ごめんなさい」

「もういいわ…廊下に立ってなさい！少しは反省するべきよ…」

そう言ったかと思うと先生はボクの手を引き、
廊下へと引つ張り出した。

「いい？この時間が終わるまで立っているのよ？
座ったら許さないわよ！」

「…はい。」

ガララ…

ピシャッ。

「……………」

ボクは言われるままただ立っていた。

「……………」

…どれくらい立っていただろうか…
ふと、廊下の奥に人の気配を感じた。
ボクは何故かそこから目が離せなかった。

「……………」

ボクはジッとそこを見つめる。

「…………ん？」

薄暗い廊下の奥に手招きをしている手が見えた。

「…………ひっ」

ボクは恐くなって教室を覗いた。
先生は必死に勉強を教え、みんな真剣に聞いている。
とても邪魔出来ない。

「…………。」

ボクは恐くても助けを呼ぶ事も出来ない。
助けを呼んだところでまた馬鹿にされるだけだ。

ボクはゆっくりと廊下の奥に目をやった。

「…………。」

相変わらず手招きをしている手だけが見える。

ボクはしばらく考え、その手に近づく事を決めた。

あれは…リュウちゃんの手なのだろうか…？

それとも別の手なのだろうか…？

ピンポーン

「…はいはい」

パソコンで調べものしていたママは
ゆっくりと玄関に向かいドアを開けた。

ガチャッ。

「……？」

そこには女の人が立っていた。

「どちら様で？」

「…さっき下で男の子とぶつかったんですけど…
これを落として行ったんです。」

女性はそう言って手帳を差し出す。

「…あ・セイちゃんの？ すいません、わざわざ…」

「…じゃあ、これで失礼します。」

「ありがとうございます。」

会釈をするとそのまま女性は消えて行った。
そしてママもドアを閉める。

ボタン。

012 ダレノテ？

ボクはゆっくりとその手に向かって歩き出した。

「……………」

スタッ スタッ

スタッ スタッ

「……………」

近づいてみると、

その手がリュウちゃんのものではないのがわかる。

（…誰の？）

ボクはそう思いながら歩くスピードを早めた。
すると、その手はサッと消えて行く。

ボクは更にスピードを増してその手を追い掛け、角を曲がった。

「……………」

角を曲がったそこには…

女の人が立っていた。

髪の長い女の人。

ボクを寂しそうに見下ろしていた。

「ひっ…」

ボクはびっくりしてペタンと尻餅をついた。

「……………」

その女の人顔は髪で隠れてて全然わからない。
ボクを見ているのかいないのか…。

ボクは恐かったが、黙ってるのも変なので話掛けた。

「…なんでボクを呼んだの…？
君もリユウちゃんと同じ幽霊なの？名前は何？」

「……………」

しばらくの沈黙の後、
突然その女の人は身体をモゾモゾと動かし、
壁の中に消えて行った。

「あ！ねえ…！？」

ボクの呼び止める声もむなしく、女の人が出て来なかった。

「…誰なんだろう…」

カタッ

どこからか音がした。
ボクは周りをゆっくり見渡す。

「……………」

目の前は階段になっていて
上から聞こえたのか下から聞こえたのかわからない。

カタッ。

また聞こえた。
明らかに下からだった。

ボクはゆっくりと階段の下を見る。

「……………」

…でも誰もいない。

「…あれ？」

ボクはゆっくりと元の位置に戻ろうとしたその時 -

ドンッ。

「わっ
」

誰かがボクの背中を押した。

「うわぁあっ
」

ゴロッ ゴロッ

ドゴッ ゴロッ

ドサッ。

ボクは見事に階段を転げ落ち、踊り場に倒れこんだ。

「……う。」

動けない身体を必死に動かし、階段の上の方をみた。

誰かが立っている。

そして笑っている。

リュウちゃん……？

それとも……さっきの女の人……？

ボクの記憶はだんだんと薄れ、
ゆっくりと視界を暗闇が包んで行った。

「……ん」

「……ちゃん！」

「セイちゃん！」

「……う。」

ボクがゆっくりと意識を取り戻した時、
ママの声が聞こえて来た。

「セイちゃん！ママよ！わかる？」

「ん……どうしたの？」

「どうしたの？じゃないわよ！
セイちゃん階段から落ちて気を失っていたのよ……」
「ココは病院よ！」

「……落ちた？」

ボクは痛む体を押さえ、さっきの事を思い出した。

「…そうだ！ボク誰かに背中を押されたんだ！」

「え？誰に？」

「……わからない……でも…見覚えあるよ…誰だっけ…？」

「とにかく大きなケガでなくて良かったわ。

軽い打撲で済んだし帰ってもいいみたいだから帰りましょ。」

「え？学校は…？」

「もう夕方とつくに学校は終わったわよ。」

「え？もう？」

ママは荷物を持つと先生に挨拶をしていた。
ボクは何気に病室を出てみた。

「……………」

薄暗い廊下がずっと続いている。

やっぱり病院は嫌いだ。

一時期、毎日の様に通っていた。

あの時も廊下を歩くだけで気分が暗くなっ
てすぐに家に帰りたくな
る。

今だってそうだ。

ふと廊下の奥を見ると髪の長い女の人
が奥に立っていた。

「……………！」

ボクはすぐにあの女の人だって気付いて
ずっと見つめていた。

013 オソイキタク

駐車場から家への帰り道、
ボクとママは並んで歩いていた。

元気の無いボクを気遣ってかママが話しかけて来た。

「どうしたの？セイちゃん。」

「ねえママ。リュウちゃんはやっぱりまだここにいるの？」

「そうかも知れないわね。ママにもよくわからないけど……」

「どうすればリュウちゃんは天国に行けるの？」

「リュウちゃんがこの世にやり残した事が無くなれば天国に行けるかもねえ。」

「やり残した事？」

「例えばセイちゃんと遊び足りないとか……」

ママが笑顔でそう言うとボクは首を横に振った。

「それはないよ。」

「どうして？」

「だってリュウちゃんは……」

“ボクの事嫌ってるのに……”

そう言い掛けたがボクはそのまま飲み込んだ。

するとママの携帯の着信音が鳴った。

「……はい、もしもし……ええ、はいっえ！？今からですか？……はい。わかりました、すぐに行きます。」

ママは携帯を切るとボクに鍵を渡した。

「セイちゃん！悪いんだけどママ、今から会社に行かなければならないの。すぐ帰って来るから家で待っていてくれない？」

母子家庭のボク達にはそれはよくある事。

ここでボクは我が儘を言っではいけない。

「うん。わかった」

「家は近くだからわかるでしょ？いい？寄り道しないでまっすぐ帰るのよ？」

ボクは鍵を受け取ると、そのまま歩き出した。

「うん。だからママも早く帰って来てね…」

「ごめんね…」

ママは車に戻り、すぐに見えなくなった。

…わかってる。

ママは忙しいんだ。

パパが死んでからいつだってボクの為にがんばってる。

だから…ボクはワガママ言っちゃいけない。

『寂しい。』

なんて言っちゃいけないんだ。

ボクはしばらく見つめた後、歩き出そうとしたその時 -

「危ないっ!」

…と声が聞こえたと思いきや、誰かがボクを力いっぱい押し倒した。

ドンッ!

「わっ！」

ガシャアアアーン

「……………」

上から何かが落ちて来たのだ。

「大丈夫？」

「…うん」

女の人が心配そうにボクを見つめる。

「これは植木鉢だ。危ないわね、もう少しで君に当たるトコだったわよ？」

「上から？」

ボクは上を見上げた。

「……………」

誰もいない。

隠れたのだろうか…？

それとも最初から見えない相手だろうか…？

「もしかしてリュウちゃん？」

「え？」

ボクの一言にその女の人は反応した。

「…いや、何でもないです。」

「…ねえ君…朝、手帳落とさなかった？」

「え？手帳？」

そう言われるとボクはすぐに手帳を探した。入れたはずのポケットにはなかった。

「…朝、わたしとぶつかって落として行ったのよ。ちゃんとお母さ

んに渡したから安心して…」

「…あ・ありがとございます。」

ボクはゆつくりとお辞儀をした。

「…それより、さつき何で『リュウちゃん』って言ったの？」

「あ・友達の名前です。」

「その子がやったと思ったの？」

「ううん。まさか、だって死んだもん。そんなワケない…」

「…だから死んだ『リュウちゃん』がやったの？って聞いているの」

「…え！？」

「お姉さんに正直に言いなさい、笑わないから。
リュウって子は死んでもあなたの前に現れるのね…？」

「……………ねえ」

「…ん？」

「お姉さんの後ろにいる女の人もリュウちゃんの仲間なの？」

ボクはゆつくりと指を指す。

しばらくの沈黙の後、お姉さんは口を開いた。

「あなたにも見えるのね？彼女が…」

「……………」

014 トモダチ

「-それで君はリュウちゃんが殺しにやって来たと…?」

「…うん…」

ボクは全てをそのお姉さんに話した。

見ず知らずの人に簡単に打ち明けたのはやっぱりお姉さんの後ろにいる人がリュウちゃんと同じ様に天国に行けない人に見えるから。そんな人が傍にいるお姉さんにはボクの気持ちをわかって貰える。そう確信したから。

「…リュウちゃんか…」

お姉さんは何回もその名前を繰り返す。

「やっぱりボクはリュウちゃんに殺されるのかな?」

「リュウちゃんは本当に君の事を憎んでるの?」

「わかんない。でも今日だって学校にも現れたんだよ? 色んな人にも乗り移ったり、階段から突き落とされたし…。」

「色んな人にも乗り移る?」

「それに…お姉さんの後ろにいる女の人も見たよ…」

「……………そう。」

お姉さんはしばらく黙り込んだ。

ボクの言葉に何か引つ掛かってるようだ。

「君はこのマンションの上にすんでいるの？」

「…うん！6階にママと住んでるんだ！」

「お父さんは？」

「……………パパは…死んじゃった！」

「ママと二人暮らしなの？ママの事大好き？」

「うん！だってボクの為に毎日がんばって仕事してるんだよ。がんばり過ぎて逆に心配だけどね！お姉ちゃんは…？」

「……………え？」

「パパやママは？」

「…お父さんはとくに亡くなった。お母さんは…」

「……………？」

「……………」

しばらくの沈黙の後、微妙な表情で

「お姉ちゃんが…殺しちゃった…」

「…え？」

そう言っていた気がしたが、声が小さくてよく聞き取れない。

「ん〜ん…何でもない。ほら、上まで送ってあげる。」

お姉ちゃんは4階のおばさんの家に遊びに来てるの……。」

「そうなんだ？お姉さん！ボクと友達になってくれませんか？」

「え？うん、いいよ。」

「ホントに？」

「うん。わたし…ここにしばらくいるから…」

「ありがとう！」

こうしてボクとお姉ちゃんは“友達”になった…。

エレベーターに乗り、ボクの住んでる6階を押す。

ピッ。

「すいませ〜ん！待ってくださ〜い！」

ドアを閉めようとしたら、買い物袋を持った女の人が走って来た。

「…はあ…はあ…ありがとう。久しぶりね…セイちゃん！」

「…あ…はい。」

走って来たのはリュウちゃんママだった。

ガタン。

ドアが閉まると笑顔で話し掛けて来た。

「…どう？ちゃんと学校には行ってるの？」

「…はい」

「良かった。だってリュウがいなくなってから元気なかったから…」

「おばさんは平気なの…？」

「…え！？」

「…だって…」

リュウちゃんのママは笑顔を作り、

「元気なフリでもしなきゃやってられないもの…」

だからセイちゃんが元気になって嬉しいわ…」

6階に着き、ボクらは部屋へと歩き出す。

「…じゃあまたね!」

リュウちゃんのママはそう言い残してボクの隣の部屋へ入っていった。

「…今のがそのリュウって子のお母さん?」

「…うん。ねえ!ボクの家に来てよ!ゲームでもやらない?」

ボクはお姉ちゃんを家に誘った。

だってせっかく仲良くなったし、そのまま帰るには物足りない気がする。

「……うん、いいよ」

お姉ちゃんはニコリと微笑んだ。

ボクはすぐに鍵でドアを開け、お姉さんを入れた。

中に入るとボクは冷蔵庫からジュースを取り出したグラスに注ぎ、お姉さんに渡した。

「ありがと。お母さんはあまり家にいないの?」

「うん。でも慣れたよ。ボクも17だし…」

「わたしも小さい頃はよく一人だった。

お母さんを恨んだ事もあったわ。

でも少しずつわかって来るのよね…」

お母さんもがんばってるんだって…ここが君の部屋…?」

「…うん。」

お姉さんはゆつくりと部屋を眺める。

そして、何故か窓から外を眺めていた。

「…もしかして…そこに見えるベランダって…リュウくんの家?」

「うん!」

「…じゃあ、あれが?」

「…え?」

ボクは窓から隣のベランダを見た。

そこにはリュウちゃんがこつちを見て立っていた。

何かを訴えるように…。

015 アノヒミタモノ

リュウちゃんはただ突っ立っていた。
そしてボクを哀しそうな目でみている。

「いつもあーしてボクを見ている。」

「あなたを？ セイクン……。」

ボクはゆっくりと首を縦に振った。

「……………」

「お姉ちゃんのウシロにいる女の人もそうなんですよ？
お姉ちゃんが不幸になるのをただ見つめている…そうでしょ？」

「……………そうね。わたしにも分からない。何故、彼女は何かもしないのか……。」

お姉ちゃんは決してウシロにいる女の人を見ようとはしない。
いる事に慣れて見ようとしはないのか、それとも本当は見えてないのか……。

「じゃあボクやお姉ちゃんが死んだら喜ぶのかな？」

「それはないわ。自殺でもしようとしたら逆に止められるわよ。」

そう言っとお姉ちゃんは歩き出した。

「もうその話は終わってゲームでもしよつか。」

振り返ったその顔は笑顔だったのでボクも笑顔を作り、

「…うん！」

…と、返事をした。

そして、ボクとお姉ちゃんはゲームに夢中になり、あっという間に夜になった。

「もう8時なのにママ遅いね。」

携帯の時計を見たお姉ちゃんはびくりしながら言った。

「いつもそうだよ！仕事忙しいからね…」

「…わかるなあ。キミの気持ち。」

でも…やっぱり寂しいモンね。ちょっと休憩！トイレ借りるわねー」

お姉ちゃんはそう言うのと立ち上がった。

「廊下の横にあるよ」

「…うん。あれ？あなたのママのパソコンつけっぱなしよ…」

「ママそそっかしいからね！いつものことだよ」

ボクは苦笑しながらお姉ちゃんを見た。

お姉ちゃんは何故かパソコンの画面を見ながら固まっていた。

「…お姉ちゃん？」

「あ・向こうにある？わかった。」

そう言つてトイレに向かった。ボクは気になりパソコンを見る。そこには一人の男の人の顔とプロフィールらしきものが書かれていた。

「大友…ナオ…キ？」

ボクはその男の顔をじっくり見る。

「…どこかで…」

だが、なかなか思い出すことが出来ない。

「……ふう。」

お姉ちゃんがトイレから戻つて来た。そしてすぐにボクに質問してきた。

「どこかで見覚えあるでしょ？」

「…え！？」

「君は絶対、この男と会った事あるはずよ。思い出して…」

「…わからない。そんな気がするけど…思い出せないよ。」

「……そう。」

お姉ちゃんはゆっくりと腰を下ろした。

「お姉ちゃんは知ってるの？この人…」

「……………」

お姉ちゃんはボクの質問に顔を強張らせる。

「ねえ、セイくん…リュウちゃんが死んだのがこの男のせいだって言ったらキミは信じる？」

「…え？だってリュウちゃんはベランダから落ちて……………」

「なんでリュウちゃんはベランダから落ちたの？」

「……え？」

「…セイくん！君は本当は知ってるんでしょ？」

「…え？なにを？」

「リュウくんが死んだのは…事故なんかじゃないって……………」

「え？わからない！」

「正直に言って！」

「知らないっ！知らないったら！」

ボクは立ち上がり部屋へと走り出した。

「…セイクン！」

そして勢いよくドアを閉めた。

ボタン。

「……………」

ドン　ドン　ドン

「セイクンっ！開けて！お姉ちゃんが悪かった…ごめんっ」

「……………」

「セイクンっ！ホントにごめんっ！」

「……………あの日……………」

「…え！？」

「あの日…ボクはシッコしたくて夜中に目を覚ましたんだ…。」

「……………」

「外に人の気配感じたから何気に窓からリュウちゃん家のベランダを覗いたんだ…」

そしたら…口を塞がれたリュウちゃんが見えて…」

「…え？」

「そしたら！リュウちゃんのパパとママは…そのままリュウちゃんを…」

リュウちゃんを『ポイツ』て…！」

「……………！」

016 アノメ

「…つまり、リュウくんは両親に殺されたのね？」

「うん。リュウちゃん…助けを求めてた。ボクが窓から覗いてるの気付いてた…でも…ボクにはどうする事も…」

「……そうよね…いくらなんでも…あの状況じゃ助けるなんて…」

「何度も何度もボクを見つめ、目で訴えていた。」

「……………」

「だからリュウちゃんはボクの前に現れるんだっ！リュウちゃんを落としたパパやママよりも助けなかったボクを怨んでるだよっ！」

ボクが興奮して言うとお姉ちゃんは首を振り、

「セイくん…それは違うよ…」

「なにが違うの！？だってリュウちゃんは哀しそうにボクの前…寂しそうにボクを見ているんだよ…！」

「リュウくんはきつとなにかを伝えようと君の前に現れたのよ。」

「何かって?」

「それはわからない」

お姉ちゃんはそう言うと言ったまま何も言わなかった。ボクはその沈黙が恐くてドアを開けた。

ガチャッ。

「……………」

ドアの向こうでお姉ちゃんは壁にもたれ座っていた。そして、ドアを開けたボクを優しく見つめていた。

「……わたしにもわからないのよ……彼女はホントに彼女の幽霊なのか……それとも彼の作り出した幻なのか……今でも……」

そう言ったお姉ちゃんの様子はまさしくリュウちゃんと同じ『寂しい顔』をしていた。

「……お姉ちゃん……」

ボクはゆっくりと歩き、そしてお姉ちゃんの傍に座った。ボクとお姉ちゃんとはしばらく何も話さなかった。沈黙が恐かったけど、お互い心が通じ合えた気がした。

「でも少しでも彼に近づけた。」

「え？」

ボクがそう言った時、ママが帰って来た。

「ただいまあー！遅くなってごめんねー」

買物袋をたくさん手に、ママはドタドタと歩いて来た。ふと、ボク以外の人間がいる事に気付く。

「……あら？あなたは確か……」

「……どうもすみません。勝手に邪魔して……」

ママはびつくしたかと思えばすぐに笑顔になり、

「いえいえ。ちょうど良かった！たくさん買物して来たんで一緒に食べませんか？落とし物拾った御礼もまだですし……」

「……あ……でも……」

「そうしなよ！ママの料理うまいんだ！」

ボクは自慢げにお姉ちゃんに言った。お姉ちゃんは少し考え、

「そうね。」

と、さっきまでの『寂しい』表情は跡形もなく笑顔で返事をした。そしてボク達は楽しい夜を過ごした。

翌日。

「行ってきまーす！」

ボクはいつもの様に学校へ行こうとドアを開ける。

「気をつけてね！ちゃんと手帳は持ってるね？」

「うん！行ってくるー」

ボクは急ぎ足でエレベーターに向かい、ボタンを押す。

ガアアアアーツ

ドアが開き、一階のボタンを押すとドアは自然に閉まろうとした。
その時

「待って！」

ガダン。

外から誰かが閉まろうとしていたドアをこじ開けた。

「間に合ったあ」

そう言ったのはリュウちゃんのパパだった。ボクは少しびっくりした。

「脅かしてすまないね。おじさんも急いでいるからね。」

リュウちゃんのパパは笑顔で照れていたが、目は笑っていなかった。ただ…あの時と『同じ目』をしていた。

「……………」

…ボクが部屋にいた時…

リュウちゃんを落とした後…ボクに気付いた時の…

…あの目に…

017 リュウチャンノパパ

エレベーターはゆっくりと下りている。

ボクはあまりの恐さにじっと点滅している数字をみていた。

ゴォォ
…

「……………」。

「……………セイくん……………」

突然、ボクを呼ぶのでボクは声が裏返る。

「は・はい？」

ゴォォ
…

「見たんだろ？」

「……………！」

ゴオオオ…

「何を…？」

ボクはワザと知らないフリをした。

「誰にも言っていないだろ…？」

ゴオオ…

「何言ってるの？おじさん…」

リュウちゃんのパパはボクが知らないフリをしたのが気にいらなかったのか、急に顔を耳元に近づけて言った。

「君もリュウのようにポイ捨てされたいのか？」

「……………！？」

ボクはあまりの恐怖にただ唾を飲むしかなかった。

ゴオオオオオーツ

ガタン。

一階に着くとドアが開いた。

ボクはリュウちゃんのパパと目を合わす事なく、エレベーターから降り、逃げる様に走った。

ダツダツ。

「はあ…はあ…」

タツタツタツタツ

後ろを見たが追ってくる気配はない。だけど、止まる事は出来ずそ

のままバス停まで走った。

「はあ…はあ…はあ…」

タッタッタッタッタ

バス停に着いた。

到着予定時間でないせいかまだバスは到着していない。

「…はあ…はあ…」

ボクは必死に呼吸を整えようと、深呼吸をする。

「…すう…はあ…すう…はあ…」

バスが見えないか奥に目をやる。

すると、見たのはバスではなくリュウちゃんのパパだった。

「…………え？」

普段ならリュウちゃんのパパは反対方向でこっち側を歩くななんて有り得ない。そして何故かまっすぐにボクを見つめていた。

ザッ。ザッ。ザッ。

ゆっくりとボクに近づいて来る。

「……………なんで？」

ザッ。ザッ。ザッ。

「……………う…ああ…」

すごく恐くなったボクは恐怖で動けない。

ザッ。ザッ。ザッ。ザッ。

「…っ…ああ…あ。」

リュウちゃんのパパは無表情でどんどん近づいて来て、その顔が無表情だって事もわかって来た。
ちょうどその時、バスの姿が見えた。

「…はっ！来たっ」

バスはリュウちゃんのパパを通り越し、ボクの前に停車する。

ガチャッ。

そして扉が開いた。

ダダダダダ…。

ボクは階段を駆け登り、バスに勢いよく乗る。

「もっと落ち着いて乗りなさいっ！」

先生の注意を無視してボクはいつもの席に座ると、窓から外の様子を見た。

「……………あれ？」

リュウちゃんのパパの姿はどこにも見えない。そのまま会社に行つたのか、ボクの見間違いなのか…。

「ワザとらしい！そんなに目立ちたいの？」

「……………え？」

萌ちゃんがボクに向かって言った。

「ちっ…違つよ！目立つつもりでしたんじゃない！」

「嘘よ！見え見えなのよ！年上のクセにガキね！」

「……………っ！」

ボクはムカついたが、何も言い返さなかった。しかし何で萌ちゃんはボクにいちいち突っ掛かるのだろう…。

そう思つてゐるうちにバスは学校へと到着した。

ボクはゆっくりと立ち上がり、いつもの様に最後に下りようとしたら運転手さんがボクに話し掛けた。

「…よお、ボク。人生楽しんでるかい？」

「……………」

ボクは運転手を見つめた。

「……………」

「お兄ちゃんとゲームしようか？」

「……………」

そうか…！

どうりで見覚えあるはずだっ…！

昨日、ママのパソコンに出てた男…

ナツキお姉ちゃんが言ってた…

この運転手こそが…

…オオトモ ナオキ…

018 イイカケ

ボクはジツと運転手さんの顔を見つめた。

「……………」

「どうした？俺の顔に何かついてるか？」

「うつんっ」

ボクは返事をするバスから降りた。

「リュウが淋しがってるぜ。お前がいなからな…！」

「え！？」

振り返ると運転手さんは笑っていた。

「お前がリュウを殺した。」

「…ちっ、違う！殺したのはリュウちゃんのパパとママだっ！」

「でもお前は見ただろう？リュウの助けを求める目を…」

「…でもっ！ボクにはどうする事もっ…」

「そうかな？窓を開けて叫ぶ事が出来たはずだ。ママに助けを呼ぶ事だって…」

「間に合わなかったんだっ」

「ホントは違うだろ？」

「え！？」

「死んで欲しかったんだろ…？」

「……っ！？」

「お前にとってリュウは邪魔だった。うっとおしかった。」

「……………っ」

「セイくん！何してるのっ！早く教室に行きなさいっ！」

奥から先生の怒鳴り声が聞こえる。

それでも構わずにボクは運転手さんを見つめていた。

「だから君を選んだ。」

「…………え？」

ガダン。

バスのドアは閉まり、そのまま発車して見えなくなった。

「…………。」

「セイちゃん！何ボツーとしてるの！早く教室へ！」

先生はズカズカと歩いて来てボクの手を引っ張った。

「全く！あなたはいつから問題児になったの！？まるでリュウちゃんみたい！」

「…………え？」

「いつもそうやって周りの人を困らせてばかりで！
あなたもそんな風になって欲しくないわ！」

先生はすごく怒っていた。

それよりもボクは今、初めてここでリュウちゃんが問題児だと気付いた。

「え？いつどこでリュウちゃんが問題を起こしたの？」

そう言いかけたが、あえて聞かなかった。

教室に入るとみんながボクを見ていた。

相変わらずみんなのボクに対する視線はすごく冷たく恐かった。

「…………。」

ガラッ。

ボクは静かに席につく。

「何ダラダラしてんのよ！年上のクセにトロいわね！」

萌ちゃんがボクを見るなり怒鳴る。
ボクは萌ちゃんをジッと見つめた。

「な・何よ！睨んだって恐くないわよ！アンタなんか……」

「……ねえ……リュウちゃんの事なんだけど。」

「は？リュウがどうかした？」

「……問題見って本当？」

その質問に萌ちゃんは反応する。

「……誰が言ったの？」

「……………」

「あ・先生しかないか…そんな事言うの。」

「ホントなの？」

「そうかもね。」

「え？なんで？だって別に学校では普通だったじゃない？
いつも一緒だったからわかるモン。
リュウちゃんはボクがいないと何にも出来ないし…」

「クスッ。ホント何もわかってないね。
セイちゃんは…。あのねー、
リュウくんはね…」

「コラッ！今は授業中よ！静かにしてっ！」

萌ちゃんが何かを言いかけたが、
先生が注意してきたので話しはそこで終わってしまった。

「……………」

ボクは萌ちゃんの言いかけた言葉が気になり苛立ちを隠せなかった。

019 イキテイル？

休憩時間、ボクは萌ちゃんに色々聞こうとしたが、萌ちゃんの姿はなかった。

「…あれ？さっきまでいたのに…」

ボクは廊下に出たが、萌ちゃんらしき姿はない。

「そうだ！」

唯一、このクラスでそれなりに仲の良い友達がいた事を思い出した。

彼の名前は『アユム』くん。こんなボクにも普通に接してくれる男の子だ。

「アユムくんっ！教えて欲しい事があるんだ！」

休み時間にも関わらず机で勉強をしていたアユムくんがボクに気付いて返事をした。

「どうしたの？セイくん」

「リュウちゃんの事だけどっ…！」

「うん、なに？」

「問題児だったってホント？」

「…うん…セイくん本当に何も知らないの？」

「知らないよっ！だってあんまりしゃべらないし…ずっとボクの後を付いて来てただけじゃない！」

「うん、最初は。だけど最近になってから急に喋り出す様になったんだ。」

「え？ホントに？」

「突然だったよ…どうしてだろう。」

「……………」

タッタッタツ…

「…ん？」

窓の向こうにリュウちゃんの後ろ姿が見えた。

「…リュウちゃん？」

ボクは急いで後を追った。

「待って！リュウちゃん！」

走り去るボクを不思議そうに眺めるアユムくん。

タッタッタツ。

リュウちゃんは角を曲がる。

「待って！」

ボクも急いで角を曲がる。

「あつ！」

曲がると目の前にリュウちゃんのママが立っていた。

「あら、セイちゃん…どうしたの？」

「…はあ…はあ…ねえ…今…リュウちゃんがいたよね？走って来たでしょ？」

「……リュウが？」

「うん！あれは絶対そうだ！おばさんも見たでしょ？」

「セイちゃん…リュウはもういなくなったの。その意味わかるでしょ？」

「わかるけどっ」

「だから落ち着いて…」

リュウちゃんのママはそう言つと優しくボクの頭を撫でた。

「……………」。

ボクはリュウちゃんのママの手を見る。そして、見覚えがある事に気がついた。

「……………！？」

「どうしたの？セイちゃん…」

「……………」。

「…セイちゃん…?」

「…この手だ…」

「…え!?!」

リュウちゃんのママは不思議そうな顔をする。

「…そうだよ! まちがいないっ!」

「何がまちがいないの? ワケわからない事言わないの!」

「この前…ボクを突き落とした手だっ!」

「…何を言ってるの?」

「だって親指の付けねにホクロがあったんだモン! …あれはおばさんだったんだね!?!」

「……………」

ボクはリュウちゃんのママの顔をジッと見つめていた。リュウちゃ

んのママもこっちを見る。

「…知らないフリしてればいいのに…」

リュウちゃんのパパはポツリとそう言つとロボットの様にジリジリと歩み寄る。

「……………なに？」

ボクが聞くとリュウちゃんのパパはニタリと笑う。ボクは恐くなつて後退りする。

「…あの時、死んでれば良かったのに…」

ボクは怖くなりながらも口を開いた。

「リュウちゃんみたいにボクを殺すの？」

「リュウは事故で死んだのよ。」

「じゃあ何でボクを殺すの？ボクがあの時見たから殺すんでしょ？」

「…違うわ。リュウが寂しがってると思つて…ねえ、セイちゃんも寂しいでしょ？」

「……………」

「…だからリュウのそばに…」

「勝手なこと言うなっ！殺したのはそっちじゃないかっ！なのに…
なんでボクがっ！」

ボクはかなり頭に来た。大人の勝手な都合で子供を殺したクセに、
その次はボクを殺す？

…なんて馬鹿らしい話なんだ！

ボクは力いっぱいリュウちゃんのママをどついた。

「……あっ！！！！」

こう見えてもボクは17歳。
体だってもう大人に近い。

力だってある。

だから、どつかれたリュウちゃんのママは「およよ。」と、よろけ
ながら姿が見えなくなった。

ゴロッ

ゴロッ

ゴロッ

ゴロッ

ゴロッ

リュウちゃんのママはそのまま後ろの階段を転げ落ちたのだ。

「きゃああっ」

「……！」

「生きてるの。」

「え？」

ボクは突然の声に後ろに振り返る。萌ちゃんが背後に立っていた。

「リュウは生きてるの。」

「生きてる？」

萌ちゃんが無表情でボクを見ていた。

「生きてる？どついう事？」

ボクはもう一度萌ちゃんに問い掛けた。だつてリュウちゃんは死んだもん。ちゃんとこの目で…

「生きているの！」

「じゃあ…君にも見えるの？リュウちゃんの幽霊が？」

ボクは恐る恐る聞く。

「幽霊？幽霊つて死んだ人になるんでしょ？リュウは死んでないつてば！さっきから言ってるじゃない！頭悪いね！年上のクセに！」

何故かキレル萌ちゃん。ますますボクは意味がわからず、言つてはいけない事を口走る。

「嘘だよ！だつて見たんだモン！隣のベランダから落ちるの！」

萌ちゃんはしばらく黙ってたが、また口を開いた。

「セイちゃん…。気付いてた？クラスのみんなからいじめられてたの…。あんたいじめられてのよ？？」

「え？」

「黒板消しが落ちてきたり、モノが失くったりしてたでしょ？ クラスのみんなからシカトされたり…自分で気付いてたでしょ？」

「え？ そうなの？」

ボクは驚いた。みんなからいじめられてたなんて。初耳だ。…そうか、だから視線が冷たく感じたんだ。黒板消しもたまたま落ちて来たワケじゃなく…全部意図的なんだ？

「全部ね…リュウの命令なの。」

「え！？ リュウちゃんのこと？」

ボクは更におどろく。

「そう。リュウは自分の手を汚さず、アンタをいじめてたの。その『イジメ』はまだ続いている…。だからリュウは生きてるの。」

「じゃっ…じゃあ！ やめたらいいじゃないか！ リュウちゃんはもういないんだから！」

「アンタが悪いのよ！ クラスで年上のクセに知能レベルが低いアンタがっ！ 見ててイライラするものっ！ みんなそう思ってる！ だから

なくならないのっ！全部アンタが悪い！アンタの存在が『イジメ』を作ってるの！」

萌ちゃんは叫んでいた。口からはよだれが垂れ、瞬きすらまともにできない。筋肉をうまくコントロールできない。

そうだよ。ボクらは障害者。ここにいる人間、まともじゃない。萌ちゃんだってりっぱな障害者。

でも、ボクは我慢出来ず、言っちゃった。

「クズ！」

それがせいっぱいだった。だけど、萌ちゃんには効いた。

「…ううう」

突然、涙を流してはボクに向かって走って来た。

「うあああああっ！」

萌ちゃんはスムーズに動かす事の出来ない身体を走らせ、ボクを叩こうした。

だが、ボクは『ひよい』と萌ちゃんの攻撃をよけた。

「あっ！」

そう思った時には遅かった。リュウちゃんママ同様、萌ちゃんも落ちたのだ。

「うあああっ！」

コロッ

コロッ

コロッ

コロッ

コロッ

「…………あ。」

ドサッ。

「…………。」

「……………」

しばらくの沈黙。

ボクはゆっくりと唾を飲み込む。

萌ちゃんは動かなかったが、意識はあるらしく声を出す。

「…ううう。」

「萌ちゃん？」

萌ちゃんはゆっくりと身体を起こそうとした。だが、落ちたショックのせいかうまく起き上がれない。

「うあああああ…」

身体をバタバタさせてうめき声をあげる。

「うあああああっ」

「……………」

ボクはゆっくりと後退りする。そして走り出した。

タッタッタッ…

「…はあ…はあ…」

ボクのせいじゃない。

あれはみんなリュウちゃんのせいだっ！

ボクは悪くないっ…！

リュウちゃんのせいっ！

「はあ…はあ…」

だが、ボクの走りはいつしかスキップに変わって行った。

021 リュウトヨブコエ

ボクは家に帰ってくるなり、ナツキお姉ちゃんにバスの運転手さんがパソコンで見た、『オオトモナオキ』だったことを伝えた。

「そっか。そんな目の前にいたのね…」

「うん！まちがいないよ！あいつ…毎朝、ボクを見てたんだっ」

ボクはさっきの萌ちゃんの件があつたせいか、妙に興奮していた。

「ねえ明日の朝…わたしもバス停に行くわ。この目で確かめたいし…いや、学校がいいかな？みんな降りた後に声を掛けてみるわ。」

「駄目だよ！危ないよ！あいつ…なんか怖い…！」

ボクがそう言つとナツキお姉ちゃんは微笑み、

「大丈夫よ。わたしなら。彼は問題じゃない…」

「…え？」

「それにわたしには時間がないかもしれない。」

ナツキお姉ちゃんはポツリと呟いた。

それってどういう事？って聞きたかったけど、何故か聞けなかった。

ボクは家に帰った。夜9時過ぎだというのにママはまだ帰って来ない。家の静けさがボクには恐かった。孤独だった。

「ボクは17歳だ。もう半分は大人なんだ。こんなコトで怖がっちゃいけないんだ…淋しがっては…」

ボクは独り言を言っでは自分の部屋に入った。相変わらず部屋は不気味さを増してた。リュウちゃんが死んで以来、ボクは自分の部屋が嫌いになった。そして、隣が見えるその窓も嫌になった。

「……………」

恐る恐る窓を見る。隣のベランダが見え、どうやら、中には人はいないようだ。

「……………」

ボクはベッドに横になり、目を閉じる。そしてあの時の事を思い出す。

リュウちゃんが『ポイ捨て』された時の事。

リュウちゃんは小さくなって行った。雨と一緒に見えなくなる。まるで闇に吸い込まれていく様に。

ザ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ー
ツ

消えていくリュウちゃんを見届けた後、2人は何かを話していた。リュウちゃんのママは泣いていた。なんで泣くんだった？自分でやっ
といて……。リュウちゃんのパパは泣いてるリュウちゃんのママを抱
きしめながら、ボクを見る。ボクはびっくりしてそのままベッドに
戻った……。

でも、
なんでだろう…。

なんで2人はリュウちゃんを『ポイ捨て』したんだろう…。

なんで……そんな事する必要があつたんだろう。

ボクにはどう考えてもわからなかった。わかるはずもない。そしてボクはいつしか眠りについた。

気付いた時には朝だった。

「おはよう。」

ママがいつもの様に朝食を作っていた。

「おはよう、ママ……」

眠い目をこすってボクは顔を洗った。歯を磨いた。服を着替え、朝食を食べた。

「行つてきまあゝす！」

ボクはエレベーターへ向かう。

ピンポーン。

機械音と同時にエレベーターの扉が開く。

「……………！」

そこにはリュウちゃんのパパとママがいた。

しかも、リュウちゃんのママは車椅子に座っていて頭に包帯を巻いていた。そうだ！昨日学校に来て階段から落ちたんだ。

「…………あ。」

ボクは一瞬にして怖くなった。昨日の出来事を責め、怒るんじゃないかと。リュウちゃんのママだけでなくリュウちゃんのパパもボクを怒るのでは？…と。

ボクが驚いていると、リュウちゃんのママはニコリと笑顔になり、

「おはよう。今日もいい天気ね。」

「…………。」

ボクは黙ったまま後退りをする。

リュウちゃんのパパは黙ったままボクを見ていた。顔付きが怖い。

「今から学校？リュウ…」

「え？」

「違う！こいつはリュウじゃない！」

リュウちゃんのパパが叫ぶ。

「何を言ってるの？あなた自分の子供を忘れたの？」

「こいつはリュウじゃない！リュウは死んだんだっ！」

「じゃあ…目の前にいるこの子は誰だって言うの？おかしい事言うわね？リュウ…今日のパパ面白いわね。ふふ」

そう言って肩を揺らしながら笑うリュウちゃんのパパ。

「……っ！」

ボクがリュウだって？

リュウちゃんのパパがボクのパパだって？

リュウちゃんのパパがボクのパパだって？

ボクにはパパなんていないっ！いないんだっ！

ボクはただ怒っていた。

022 ナツキオネエチャントナオキ

ボクは階段から下に降り、バス停へ向かった。

なんて意味わからない話なんだろう！

リュウちゃんのママがボクの事を『リュウ』と呼んだ。
あんなのと一緒にしないでくれ！

ボクはそう叫びたかった！

でも言えるワケがない。だってボク、そんな『キャラ』じゃないモン。バス停が見えた、既にバスの姿があつたのでボクは急ぎ足でバスに向かう。

「遅れてごめんなさい！」

運転席には『オオトモナオキ』が居た。

「……………」

ボクは目を合わさない様に中に入る。

そつえばナツキお姉ちゃんがあいつの顔見る為に学校へ行くって
言ってたな…。

学校にいるんだろうか？

ブウウーン。

バスは動きだし、学校へ向かった。

「セイくん！あなたに後で話あるから学校着いたら先生について来なさい。」

「…はい…」

ボクはバスの中を見渡す。萌ちゃんの姿は見えない。先生が何を言いたいのかわかった。きっと昨日の事だろう。

ブウウウ…

バスはゆっくりと学校へ向かっている。

ホントにナツキお姉ちゃんはいるのだろうか…？

ボクは少し気になっていた。そしてバスは学校の門に入った。

「……………」

だが、ナツキお姉ちゃんの姿はない。

ボクは立ち上がり視界をグルグルしたが、やはり見えない。

「セイちゃん！まだバスは停まってません！立ち上がったらダメでしょう！？」

先生はすぐに注意をしたが、ボクの頭には入らなかった。
そしてバスは停まる。

ガタン。

ドアが開き、前の人から順番よく降りていく。

「……………」

ボクはじっとしたまま動かなかった。

「あれ？さっき立ち上がったかと思えば今度は座って動かない気？」

先生がボクに向かって言う。

「違うモン！ちゃんと降りるモン！」

ムキになったボクは立ち上がりバスから降りようとしたら、

「ふふっ」

運転席にいた『オオトモナオキ』がボクを見て笑った。ボクは人に笑われるのが嫌いだ。特に今みたいに鼻で笑われるのが。ボクは『ナオキ』を睨みながらバスを降りると人とぶつかった。

「…すいませ…あ！」

ナツキお姉ちゃんが立っていた。

ナツキお姉ちゃんはじっと運転席を見ていた。そして口を開く。

「ひさしぶりね。ナオキくん…」

「……………」

だが『ナオキ』は反応しない。

「セイちゃん！早くこっちに来なさい！お話があります！」

先生が奥から呼んでいた。

「あなた…一体なにがしたいの？」

ナツキお姉ちゃんは続けて聞く。

「セイちゃんこっちに来なさいって言ってるでしょ！」

先生がまたボクを呼ぶ。ボクは仕方なく先生の方へ歩いて行った。バスからゆつくりと遠ざかる。

「何故…ここが？」

最後に聞こえた『ナオキ』の言葉。その瞬間、バスの扉は閉まり、バスはナツキお姉ちゃんを乗せてどこかへ消えて行った。

「…あ。」

ボクはバスをじっと見つめていた。先生がボクの手を引っ張る。

どこに行っただろう…？

ボクは消えていくバスをただ見つめていた。

そして指導室みたいな所に連れて行かれた。

そこには萌ちゃんと母親がいた。二人はボクをすごい目で睨んでいた。

023 ボクノハツゲン

「セイくん…あなた萌ちゃんを階段から突き落としたそうね？」

先生の最初の一言だった。

ボクはきっぱりと言った。

「違います！萌ちゃんは自分から落ちたんです！ボクは萌ちゃんに触れてません！」

「嘘よ！じゃなきゃ何であたしか落ちたワケ？」

萌ちゃんはよだれを垂らしながら反論して来た。

「そうです！萌は自分から階段を転げ落ちる子じゃありません！絶対誰かが突き落としたんです！」

萌ちゃんのママはボクを睨みながら言った。

「……………」

ボクは返事に困った。だってボクは何もしてないのに…それ以上何を説明すればいいのだから…と。

「ほら！何も言えなくなってる！だってホントの事だもんね？」

萌ちゃんはニタつきながらボクに言った。

「違うモン！ボクは何もしてない…！」

ボクが否定をした瞬間、ドアが開き、ママが入って来た。

「すみません！遅れちゃって…」

「…ママ？」

「私が呼んだのよ。この事はちゃんとお母さんにも言わないとね。」

先生がボクを見つめながら言う。

「でもボクは何もしてない！」

ボクは大声で怒鳴った。

「セイちゃん！静かにして…」

ママがボクを止める。

「まあ、萌も軽いケガで済んだからいいんですけど二度とこういう事が無いようにお母さんからもちやんと言って下さい！あと先生方もくれぐれも気をつけてください！」

萌ちゃんのママは怒りを抑えながら言った。

「はい。まことに申し訳ございませんでした。」

ママと先生は頭を下げる。

「なんで！？なんでママが謝るの！？ボクは何も悪いことしてないのに…！悪いのは…リュウちゃんだよ！」

ボクは少し間を置いて続ける。

「…そうだよ…リュウちゃんだよ！これは全部リュウちゃんがやったんだ！」

「セイちゃんやめなさい！」

ママが怒鳴る。

「なんで？だって本当の事だよ？」

「いいから静かになさい！」

「でもっ…！」

ボクの発言に萌ちゃんのママが質問した。

「リュウ？あの子は確か…事故でお亡くなりになった子でしょ？何

「であの子が？」

「……………」

「リュウは死んだのよ？死んだ人間があたしを突き落とす！？ありえないね！ホラ！ママ！セイちゃんってこうやっていつもあたしをいじめるんだよ！？ひどいと思わない！？そしてこのザマよ！」

萌ちゃんの意味不明な言葉にボクは我慢出来ず、

「…なに言ってるんだよ！キミが生きてるって言ったんじゃないか…！萌ちゃんがリュウちゃんの命令でボクをいじめてるって…ねえ、先生…ボクって教室でいじめられてたんですか？」

「何言ってるの？そんなワケないでしょう？いじめなんて…そんな…」

「だって萌ちゃんが言ってたんだモン！」

「セイ！もうやめなさいっ！」

「…だって！」

「お宅はいったいどういう教育をなさってるんですか？死んだ子に

責任をかぶせるなんて…」

「すみませんっ！ちゃんと言い聞かせますから…」

ママはまたペコリと頭を下げた。

「だからボクは何もやってないって…あの時だって…そういえば…リュウちゃんのママは？」

「リュウちゃんのママがどうかした？」

「…萌ちゃんが階段落ちる前に…リュウちゃんのママがいたんだ…萌ちゃんも見たよね？」

「なに言ってるの？誰もいないわよ。ママ…もういい。頭痛くなってきた…この話は終わりにして帰ろう…」

「…もう…萌ちゃんは優しいから…わかった。今日の所は帰りましよう…失礼します。」

そういつて萌ちゃんと萌ちゃんのママは家へ帰った。

ボクは訳がわからずただ黙っていた。

「…ママごめんなさい。でもボク何もしてないよ！信じて！」

ボクは今日一日だけ謹慎処分を受けた。ボクの発言があまりにも現実離れしていて信じて貰えなかった結果。

学校から出たママはあまりしゃべろうとしないのでボクから言い出した。

「わかってる。でもリュウちゃんの名前を出したのはマズかったんじゃない？死んだ人間が何かをやったとしてもそれは見た人しか信じられない話よ？」

「…うん。」

ボクはうつむいたまま歩いた。ママは一つ溜息を漏らすと笑顔になり

「もうやめよ？リュウちゃんの話は！そうだ！ママ今日はもう仕事ないから今から映画でも観に行く？」

「ホント！？行く！行く！」

ボクは体全部を使って嬉しさを表現した。それはそれはまるでミュージカルのように。だってママと出掛けるなんて久しぶりだもん。ママも嬉しそうなボクを見て微笑む。

そして、その夜。

映画を観たあと、ボクとママは買物や食事をした。

「ママ楽しかったね！」

「そうね…最近、セイちゃんの相手してあげられなかったからママも満足！」

ママがニコリと笑うのでボクもつられて笑う。

「…………あれ!？」

奥の方にナツキお姉ちゃんの後ろ姿が見えた。

「ナツキお姉ちゃん！」

ボクは大声で名前を呼んだ。

「…………。」

だが、その後ろ姿はこっちを振り向く事なくそのまま消えて行った。

「え？今のはナツキちゃんなの！？」

ママが言う。

「だと思ったんだけど、違うかな？」

「振り向かなかったって事は違うんじゃない？」

「…そうだね。」

こうしてボクとママは家に帰った。

翌日。

「行つてきまあゝす。」

「ちよっ…！セイちゃんいつもより30分早いわよ。今、バス停に行ってもまだバスは…」

ママが慌てて歩いて来た。

「うん、ちょっと下のナツキお姉ちゃんと話したくて…」

「こんな朝から迷惑よ！だいたいまだ寝てるかもしれないのに…」

「起きてるよ！毎日6時には起きてるみたいな事言ってたからさ。そのために早く起きて御飯も食べたんじゃないか…」

「ママはたまたま早く起きたと思ったのよ。あつちに迷惑じゃなければいいけどね…」

「大丈夫だよ！じゃっ、行ってくる。」

「いなかったらすぐに戻るのよ？」

「うん！」

ガチャツ。

ボタン。

ボクはママがまだ何か言いた気なんで逃げるようにドアを開け、閉めた。

「…ふう。」

ボクは早速エレベータに向かおうと歩きだしたら、背後から音が聞こえた。

ガチャッ。

「…ん？」

振り向くとリュウちゃんの家ドアが少しだけ開いていた。

「……………！」

そして、隙間からリュウちゃんママの顔が見えた。

「……………？」

ドアは更に開き、リュウちゃんママが車椅子ごと出て来てボクに両手を広げた。

「わたしはここよ、リュウ。さあおいで…！」

「え？」

ボクがあっけに取られていると中からリュウちゃんのパパが出て来た。

「くらーよさないかー！」

リュウちゃんのパパは車椅子を家に引っ込めようとする。

「あなた何するの！？わたしはただリュウに…」

「リュウは死んだんだ！まだわからないのかっ！？」

「何言ってるの？だって目の前に…あ！待って！行かないで！」

ボクは気持ち悪くなったので走り出した。階段から下のナツキお姉ちゃんのいる家へ向かった。
なんか…気持ちわるい。

ピンポーン

ガチャッ。

ドアの向こうからナツキお姉ちゃんが出て来た。

「朝からごめんなさい。昨日の事が気になって…」

「……………」

ナツキお姉ちゃんは黙ったままボクを見つめていた。

025 ワライゴエ

「ナツキお姉ちゃん？」

「まだ時間あるよね？中に入って…」

そう言うとナツキお姉ちゃんは奥へと歩きだした。ボクは中に入るとドアを閉めた。

ボタン。

「…あの…叔母さんは？」

「昨日から泊まり込みで仕事に行ってる。ジュース飲む？そこに座って…」

「…うん…」

ボクは目の前にあったソファに座った。

「……………」

「昨日の運転手、たしかにナオキだった！」

「え！？」

お姉ちゃんはボクにジュースを差し出す。

「ありがとう。」

「…あの後バスはそのまま動き出した」

「…うん。」

ボクは一口ジュースを飲む。

「どれくらい走ったかな？気付けば林の中だった。そこでバスは停まったの。」

「……………」

「すると突然、ナオキが笑い出したの。わたしは普通に「何がおかしいの？」って聞いたたら「全部さ…」って。わたしは言ったわ「まだ馬鹿な事続ける気？」って。「馬鹿な事？何が？人を支配する事が？くはははは」…彼はずっと笑ってた。」

「……………」

「あゝあ、わかってたのにね。」

「え？わかってたって？何が？」

「彼はね、ナオキじゃないわ。」

「え？でもパソコンに出た顔だったよ！」

「うん、そう。パソコンそのモノが違う顔なの……」

「じゃあ名前が一緒に別人だったって事？」

「まあ……カモフラージュって事かな？」

「えええええ」

ボクは本物だと思ってたので白けてしまった。

「そろそろ時間じゃない？」

そう言われたボクは時計を見た。

「わっ！ホントだ！早いなあ」

ボクは一気にジュースを飲んで立ち上がる。

「ごめんなさい！帰って来てからまたお話しよーね！」

ボクは急いで玄関に向かった。

「セイちゃん！」

お姉ちゃんがボクを呼び止める。

「んー？」

「…何でもない…行つてらっしゃい…」

お姉ちゃんは笑顔でそう言った。

「うん！行つてきまーす」

ボクは家を出た。バス停には既にバスが停まっていたので急いで乗る。

そして、運転席にはナオキがいた。

「セイくん…おはよー…ははは…」

ニヤけながらナオキは笑った。そして小声で

「お前の大好きなねーちゃんを犯してやったぜ。くははは…」

「…え？」

「セイちゃん！早く席に着きなさい！」

先生が怒鳴るのでボクは急いで座る。と同時にバスは動き出した。

ブウウウウゝ

「……………」

どういう事？『犯してやった』っていう意味がよくわからない。

「……………」

「…エッチな事を無理矢理やらされたって事だよ…」

背後から声が聞こえて来た。

「…リュウちゃん？」

「しっ！あまり声を出すな。後ろも振り向くな。」

「…ねえ…もうやめようよ？こんな事して何になるの？」

「セイちゃんが苦しめばそれでいい。」

「どうして？意味がわからないよ。」

「僕にはセイちゃんしかトモダチはいない。」

「トモダチ？それがトモダチにする事か？」

「…トモダチだからこそ意味がある。イジメがいがね…クヒヒヒヒ。」

「……………」

「クヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ…」

ボクは耐え切れず耳を塞いだ。

「クヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ…」

学校に着くまでその笑い声は止まなかった。
そしてボクも後ろを振り向く事はなかった。
その笑い声はボク以外に聞こえていないみたいだった。

026 ハイセツブツ

バスは無事に学校に到着し、ボクは教室に入ろうとドアを開けた。

ガララ…。

パフッ。

頭に何かが当たった。

「……………」

いつもの黒板消しだった。

「アハハハハハハ…」

クラスみんなが笑う。

そしてボクはむせる。

「ゴホッ　ウオッホッ」

「あはは…ばあゝか！ばあゝか！あひゃひゃひゃ」

萌ちゃんがボクを指差して笑う。

「……ケホッ」

ボクはチヨークの粉が目に入ったので見えない視界で、何とか席に着いた。

「…ん？」

お尻に何かが当たったので思わず立ち上がる。

ガタタツ

お尻を触ると茶色い物体が手に付いた。

「きゃああああ！セイちゃんがウンコ漏らしてるう」

誰かが大声で言った。

「え？」

ボクは手に付着している物体の匂いを嗅いでみた。

確かにそれはウンコだった。

「おえっ。」

このウンコはもちろんボクのものであるはずがない。

ボクはどうしていいのかわからずボツとしていると、教室に先生が入って来た。

「おはよー！どうしたの？騒がしいわねっ？」

「先生！セイちゃんがウンコもらしたんです。」

「ええ！？ホントなの？」

先生はそう言いながらズカズカとボクの前までやって来てはお尻の方を見た。

「臭いわねえ。」

「先生！ボクがやったんじゃないありません！最初から椅子に乗って

あつたのをボクがその上から座ったんです!」

ボクは半分泣きかけて訴えた。

「じゃあ…これは誰のウンコだって言うの? あなた以外の誰かのモノ?」

「わかりません」

「…それとも…これもリュウちゃんの仕業だとしても言うつもり?」

「…え?」

「セイちゃん…あなたの悪いクセがまた出たわね? いくらリュウちゃんがいなくても死んだ人間のせいにするのは良くないわ」

「……………!」

ボクはショックを受けた。

先生の口からそんな言葉を聞くなんて…

目からは大粒の涙が溢れ、下をじっと見つめていた。

「…泣くヒマあつたら手を洗うなり、ティッシュで拭くなりしたら? セイちゃんのせいで授業も遅れるのよ?」

「…ひどいよ! 先生…どうしてボクの言う事信じてくれな…ヒック…いの?」

ボクは上ずる声を必死に抑えながら言った。

「…たくしようないわねえ…ホラ、トイレに行って洗ってきましょ。先生も一緒に行ってあげるから…」

先生はボクの手を引っ張って歩きだした。

ボクはトイレに着くまでの間、涙が止まらなかった。

「……………」

ガララ…。

ピシャッ。

トイレに入るなり先生が言う。

「セイちゃん、よく聞きなさい。先生はね…あなたの言うことなんてこれっぽちも信じてないのよ。」

「…え？」

「だってあなた達は障害者ですもの。何が根拠かもわからないし…その…何て言うのかな？話そのものが信じられないの」

「じゃあ先生は…ボクが嘘ついても？このウンコはボクがや

「ったと…?」

「セイちゃんにとっては違つかもしれないけど、先生にとってはあなたのウンコよ」

「……………」

ボクはスポンを脱ぎ、洗い出した。

涙が次から次へと溢れて来た。

ジャアアアアア。

「何よ、泣く事ないじゃない…」

「…泣いてないモン」

「別に先生はセイちゃんをいじめてるんじゃないのよ?ただ、あなた達みたいな障害者の言うことをイチイチ信じたら、神経がいくつあっても足りないって言ってるの!」

「…もう…いいです…先生は先に教室に行ってください。ボクはこれ洗ってから行きますから…」

「あ・そう？じゃあ…早めに来てね…」

先生はその言葉を残し教室に戻っていた。

ボクはずっとそのズボンを洗っていた。

ジャバツバジャバジャボ

背後に人の気配を感じ、く目の前にある鏡を見る。

「……っ！！」

ボクの背後に女の人が笑って立っていた。

026 ハイセツブツ（後書き）

お久しぶりです。

お待たせして申し訳ありません。ようやく連載再開です。

このまま完結まで突っ走って行きたいと思いますので
応援よろしく願います！

027 モライワライ

ボクは背後にいる女の人に向かって言った。

「オマエはナツコだな？ ナツキお姉ちゃんが言ってた…」

「…んふふっ」

その女の方はボクの嫌いな“鼻笑い”をした。

「…オマエがリュウちゃんをおかしくしたんだな？」

ボクは鏡越しに叫んだ。だが、その女の方は

「んふふっ」

と、また笑った。

「一体何なんだ！ 何で突然ボク達の前に現れたんだ！ オマエは誰だっ！」

「……………」

女はゆつくりと近づいて来る。
ボクは鏡から目が離せなかった。

「私はあなたの味方よ?」

「…え?」

「あなたをいじめてる全ての者から守ってあげる。クラスメイトやリュウちゃんから…」

「…え?」

ボクはゆつくりと後ろを振り返った。
だが、そこには女の人の姿はなかった。
鏡を見るとそこにはちゃんと映っているのに。

「……ボクを守る?」

「そうよ。…だから安心して」

「嘘だっ!リュウちゃんをあんなにしたのはお前の仕業じゃないか!信じられないよ!」

「…そう。わかった」

そう言うと女の方はゆっくりと消えて行った。

「……………」

ボクは後ろを見たが、やはり見えなかった。

「…なんだよ。」

ガラララッ。

ボクが教室に戻ると、みんなの冷たい視線が突き刺さる。

「……………」

「はい、みんなセイちゃんの事は気にしないで！授業を続けるわよ！」

先生の一言でみんな視線はボクから黒板に移った。ボクは物音を立てぬよう自分の席に向かった。

自分の席の椅子にはまだウンコが乗ったままだ。ボクが踏んだせいで、平ぺったくなっていた。

ボクはティッシュを取り出すとそれを拭く。

「偉いわね！セイちゃんは！ちゃあんと自分で後片付けするんだから…みんな拍手…！」

パチパチパチ…

先生のその一言でクラスみんなは拍手をする。あまり、人に拍手をされた事のないボクは嬉しいんだか悲しいんだかわからない複雑な気持ちでウンコを撤去した。

「…ばあゝか。」

萌ちゃんが言う。

ボクは無視したまま作業を続けた。

もちろん、このウンコを椅子に置いたのは萌ちゃんだってことくらい予想はつく。

だが、ここで反抗してしまえば萌ちゃんの怒りは更に増し状況が悪化するのには目に見えてる。

だからボクは我慢する。

ふふふ…偉いな！ボクは！

「ぶあくか！クソだ！クソだなー！オマエは！」

「……………」

「クソはさつさとトイレの中へ流されてしまえ！そしてバキュームカーに吸い込まれてしまえ！」

「……………」

「…くくつ…萌ちゃんあなた言い過ぎ…くくつ…よ……………」

先生が笑いを堪えながら注意する。
するとクラスメイトの一人が、

「バキュームカーって何ですかー？」

「セイちゃんみたいなウンコを掃除する車よ！掃除機みたいなもの
！」

萌ちゃんが大声で説明する。

「ぎやはははーっ…おもしろーい！」

028 トナリノコエ

学校が終わるとボクは家に帰らずにナツキお姉ちゃんの家へ向かった。

ガチャッ。

「どうしたの？セイちゃん？」

ボクの突然の訪問にナツキお姉ちゃんはびっくりしていた。

ボクはお姉ちゃんの顔を見ると涙が次から次へと溢れて来た。

悔しいやら哀しいやらで色んな感情が一気に押し寄せ我慢出来なかった。

「お姉ちゃん！」

ボクはお姉ちゃんに抱き着いた。

「……………」

「うわあああーん」

姉ちゃんは何も言わず、「よし、よし」と頭を撫でてくれた。

だから

ボクは思い切り泣いた。

「ぶあひやひやひやひやひやひやひやひやひやひい。見た？今の人の顔！ぶあひやひやひやひや……」

「セイちゃん、さっきまで泣いていたと思ったら今度は大笑い？」

「だって……アホじゃない？このテレビに出てる人」

「ただの歌番組なのに何故おかしいのかしら？」

ナツキお姉ちゃんにはボクに呆れていた。

「そついえばナツキお姉ちゃん：今日、あの運転手が変な事言つてたよ」

「え？」

「お姉ちゃんを…“犯した”って…」

「……そう。」

お姉ちゃんは返事をするコ―ヒ―を飲んだ。

「カラダは大丈夫なの？」

「大丈夫よ。それくらいの覚悟は出来てたし…」

「ふうん。あ・それと…ナツコっていう女に話し掛けられた…。」

「…え？なんて!？」

ナツキお姉ちゃんはボクに顔を近づけて聞いて来た。

「…ボクを…守るって…」

「守る？誰から？」

「ボクをいじめてる人達から…」

「いい！？セイちゃん！彼女を信じちゃダメよ！彼女は人の心の隙間に入り込むんだから！そこを利用してみんなを苦しめるのよっ！」

「……わかってる…お姉ちゃん…痛いよ…」

ボクの言葉に我に返り、

「あ！ごめん…強く掴み過ぎちゃったね」

お姉ちゃんは掴んだ肩からゆっくりと手を離れた。

そしてまたコーヒーを飲む。

しばらくしてボクは家に帰った。
家にはママがご飯を作っていた。

「セイちゃんおかえり！悪いんだけどさ、ママ仕事が入っちゃって今から行かないといけなくなったの！」

「…え？…うん。」

ボクは学校での事を言おうとしたが、急いで準備しているママを見て言え無かった。

翌日。

ボクは行きたくない学校へ行こうと家のドアを開けた。

「行つてきまあゝす！」

奥からは返事がない。

ママはゆつぶ遅く帰って来たらしくまだ寝ていた。

朝ご飯はちゃんとテーブルに用意してあったのでそれを食べたのだ。

ボクはもう一度言った。

「行つてきまあゝす！」

「……………」

やはり返事がなかった。ボクはゆっくりドアを閉め鍵をかけた。

ガチャン。

すると背後から――

「行つてらっしゃい」

と声が出たので振り返ると、そこにはリュウちゃんのママがドアの隙間から手を振って笑っていた。

⌈
.....
! ⌋

ボクは気持ち悪いので急ぎ足で下に降り、バスを待っていた。

バスがやって来てドアが開く。

もちろん、運転席には偽ナオキが笑って迎える。

「……楽しい一日の始まりだよお」

ボクは無視して席に着く。

すると萌ちゃんが、

「おはよ。ウンコ！今日も相変わらず臭いわね！」

…と言って笑い出した。

「ぎゅはっはっはっ」

「うんこだつてよー」

萌ちゃんだけじゃない…バスに乗ってるみんなも笑い出す。

「……………」

「きゃははははは」

「あひゃひゃひゃひゃ」

「ぶはははははははは」

……………。

…はあ…疲れた。

…何やってるんだろう。

なんでボクはこんな事してまで生きなきゃならないんだろう…

みんなの笑い声が小さくなっていく。

どうやらボクは眠たいみたいだ。

そつだ！このまま永遠に目が覚めなければいい…

…ずっと覚めなければ…

ずっと。

029 アダナティチャク

「セイクン！セイクンってば！」

「…え？」

先生の声でボクは目を覚ました。

「あなた朝から寝過ぎよ？とつくに学校に着いたわよ！早く降りなさい」

「…あ…ごめんなさい…」

ボクは起き上がるとすぐにバスを降りようとした。

「…くくく…」

運転席から笑い声がする。

偽ナオキがずっと笑っていたが、ボクは無視して急いで教室へ向かった。

教室が目の前に見えるとボクはドアの方を見た。そこに『ワナ』が仕掛けられてないかどうか確認したが、何もない。

ガララ…。

教室のみんなが一斉にボクを見る。

ボクはゆっくり席に向かった。そして昨日と同じく近づくにつれ臭って来た。

「……………！」

案の定、椅子にはウンコがあった。

「……………。」

ボクはただじっとそれを見つめていた。

ガララ…

先生が入って来た。

「ん？臭いわね！」

「先生ー！セイちゃんがまたおもらしを…」

萌ちゃんが言う。

「また！？昨日、あれほど言ったのに…！」

「違います！ボクじゃない！」

ボクは必死に訴えた。

だが、先生は表情を変えず、

「昨日も言っただでしょう？みんなが何と言おうとそれはセイちゃんがやったって…」

「そうよ！そんな臭いモノ！さっさと捨てちゃって！」

「そうだよ！ウンコ！ただでさえウンコなのに…ぐひひひひひ！」

「そうだ！ウンコだ！にやはははははは…」

「いひひひひ…」

「えへえへ…」

「あーはっはっはっ…」

「うんこ！うんこ！」

「うんこっ！！」

「ぎゃははっうんこ！」

クラスのみんなが口を開けて笑い出した。

みんな楽しそうに肩を震わせている。

「……………」

ボクは我慢出来ず、教室を飛び出しトイレへ向かった。

ガララッ

ダッダッダッダッ

「…うう。」

どんなに我慢しても涙が止まらなかった。

ダッダッダッダッ

「…んふふ。」

トイレに着くとボクは鏡を見た。

「んふふっ」

背後にナツコさんが立っていた。

「大丈夫よ？私が守ってあげるわ…」

「…お前だって信用できないっ！」

「誰だったら出来るの？…ママ？…ナツキお姉ちゃん？」

「……………」

「それはどうかしら？ママ…最近、家にいないでしょ？」

「…………え？」

「仕事が忙しいって…ホンキで信じてるの…？」

「……………？」

「まだわからないの？あなたから離れる唯一の楽しい時間だからよ？」

「…どういつ事？」

「だから、あなたなんて二次三の次って事！何が何でも仕事が大
事ってコトよ！あなたはママの仕事の邪魔って事！」

「違っっ！絶対ありえない！」

「何故そう言い切れるの？じゃあ…ナツキお姉ちゃんも信じられる
の？」

「うん！信じてるよ！」

「…んふふ…つい最近知り合った人をどんなして信じれるというの…？子供って単純で幸せだわね…きつと…この2人もあなたを裏切る時が来るわ…そんな時…私を呼びなさい…私があなただけを助けてあげる…守ってあげるわ…」

「うるさいっ！お前なんかの助けてなんかいらんやいっ！ばか！あほ！」

「…んふふ。」

女は笑うと消えて行った。

「…はあ…はあ…」

ボクはしばらくトイレにいた。

でも誰も探しに来てくれない。

先生ですら。

だから仕方なく教室に戻った。

もちろん、そこにはウンコがそのままあってボクは泣きながら片付けた。

ブウウウーン。

帰りのバスの中でボクはまた泣いていた。

涙が何故か止まらない。

ただ苦しくて仕方ないのだ。

バスが急停車する。

気付けばボク以外誰も乗ってないのだ。

「……………」？

前にいる偽ナオキの笑い声が聞こえて来た。

「うへへへ…」

偽ナオキは立ち上がりボクに歩み寄って来た。

「…？なに…！？」

ボクは意味が解らない事と恐怖で動けない。

「うへへへ…」

偽ナオキはジリジリと近づいて来る。

「前から思ってたんだよ！お前を食べたい…とな…」

「…………え？」

肩を強く掴まれ顔が近づいて来た。

「……ひっ」

額にキスをしてきた。

ボクは意味がわからず、息をするのを忘れるくらい偽ナオキの顔を見ていた。

「…大丈夫！痛くなんかないよ…痛いのは最初だけだから」

「…え？痛いって？」

「…これさ。」

偽ナオキはポケットからあるモノを出した。

「これにハマッたら快感だぜ…うへへ…」

ボクは唾を飲み込んだ。偽ナオキの出したそれは注射器だった。

「…いやだっ！」

「動くんじゃねえ！ぶつ殺されたいのか！？」

「…ひっ！！」

ボクは声を必死に抑えた。

そして今度は震えが一気に襲いかかって来た。

ガタガタガタガタガタガタ

「……………」。

ガタガタガタガタガタ

「…はあ…はあ…大丈夫だって…最初のチクツただけだ…その後は天国だぜ…はあ…はあ…」

「ううつやだ！」

ボクは首を横に振ったが、そんな抵抗もむなしく注射の針はボクの腕へ近づく。

ボクは思わず目をつぶった。

「……………！」

「……………。」

「…なんだよ！」

偽ナオキが突然、叫ぶ。

ボクはびっくりして目を開けた。

偽ナオキは後ろの座席を見つめていた。

「……………？」

「だから何でそこでお前が邪魔するんだっ！ええ！あっち行けよ！」

偽ナオキはボクを放したかと思えば後ろの座席に向かって歩きだし、注射器を持った手を振り回していた。

「てめえ！ふざけた事ぬかしてんじゃねえ！殺されたいのか！ああ！なんで邪魔すんだよ！なんでそこにいんだよ！消えろ！消えちまえよ！」

偽ナオキは必死に手を振り回していた。

見えない敵をやつけようとしてるのだ。

ボクは今は逃げるチャンスだと気づき、静かに後退りをした。

「いいからひつこんでろよ！お前が出る幕はねーんだ…ぎゃあああ
ああああ！」

「……………！」

偽ナオキを見ると振り回してた注射器が首に刺さっていた。

「てめえ…！よくも…うう…うわああああ！」

「…ひつ」

ボクは恐くなりその場から逃げた。

走って逃げた。

…タッタッタツ…

「…はあ…はあ…」

タツタツタツタツ

「…はあ…はあ…え？」

前にナツコが立っていた。

ボクはびっくりして足を止める。

「……………！」

「だから言ったでしょ。わたしはあなたの味方だって…」

「…もしかして…助けてくれた…？」

「んふふ…」

鼻笑いをするとナツコはみるみる消えて行った。

「…あ。」

「……………」

「そんなワケないでしょう！？ナツコが助けてくれた？まさか！」

ボクはナツキお姉ちゃんにさっきの事を伝えた。

「ホントだよ！もう少しであの偽ナオキに変なコトされそうになったんだモン！それをナツコが…」

「セイちゃん！騙されないでこれもワナなのよ！これがナツコのやり方なのよ？」

「違う！ナツコは助けてくれた…ナツコは味方なんだよ！前から現れては助けてあげるって言ってたモン！」

「…じゃあ…リュウちゃんもあなたを助ける為に現れたって言いけるの！？ナツコとリュウちゃんは仲間なのよ？」

「違う！リュウちゃんは悪者でナツコはいい奴なんだ！」

「…セイちゃん？」

ナツキお姉ちゃんは先生みたいに呆れた様に溜息をした。

「……………！」

ボクはムカついた。

『鼻笑い』と『溜息』だけはボクがこの世で許せないもの。

ナツキお姉ちゃんまでもボクを馬鹿にしている。

031 ダレ？

「セイちゃん…お願いだからお姉ちゃんの言うこと信じて…」

「お姉ちゃんこそ…ボクの言うこと信じてよ！ナツコはいい奴だよ。」

「…………ふう。」

ボクはお姉ちゃんの溜息にムカついた。

「またした！時々お姉ちゃんの溜息がムカつくんだよね！」

「…あ…ごめん…」

「ボク…帰る…！」

そう言ってボクはナツキお姉ちゃんの家を飛び出した。

「セイちゃん！」

遠くでボクを呼び止める声がしたがボクは無視した。

誰もボクが言っただ事を信じない…

先生も友達も…

ナツキお姉ちゃんも…

ガチャッ。

ボクは家に帰って来た。相変わらずママはいなかった。でもボクはいてもたってもいられなかったのでママに電話した。

『どうしたの？セイちゃん…』

電話の向こうではびっくりしているママがいる。

ボクはよっぽどじゃないと電話しないからだろう。

「…ママ…今すぐ帰って来て…！」

『…今は無理よ。もう少し我慢して…』

「やだ！今すぐ帰って来て！」

『どうしたの？今、ママ手が離せない仕事してるの…わかるでしょ？』

「でも帰って来て！」

『わかった。早めに帰るようにするから…待ってて…ピッ！』

電話を一方的に切られた。

「……………」

ボクは受話器を置くと部屋に入り窓の外を見つめた。
空模様は悪く今にも雨が降りそうだった。

「あゝやだな。また雨か…」

ふと隣のベランダを見るとリュウちゃんのパパもこっちを見ていた。

「……………」

ボクに向かって手を振る。

ボクは気持ち悪いのでカーテンを閉め、ベッドに横たわった。

「……………」

精神的に疲れ果てたボクは1分もしないうちに眠りについた。そして気付いた時には夜の10時を過ぎていた。

「……………ママ？」

ベッドから起き上がるなりボクは部屋を出た。

まだママは帰って来てなかった。

「早く帰るって言ったクセに…！」

ボクはソファに座り込む。

「……………」

「…まさか！」

ボクはふとナツコの言葉を思い出した。

“…あなたのママもいずれ裏切る時が来るわ…”

(…まさか…でもナツキお姉ちゃんは…やっぱりボクの言うことを信じなかったし…)

ボクは考えれば考える程恐くなり妙な孤独感に包まれた。そしてソファから立ち上がり家を出る。

ガチャッ。

エレベーターに乗り、下へ降りた。

ゴオオオオオオオッ

「……………」

1階に着く。

ボクは外でママを待つ事にした。

家では落ち着かないからだ。

雨はそんなに降ってはいなかったが気温が低く少し肌寒かった。

「…ママ…早く帰って来て…」

ボクは独り言をポツリと言った。

「……………」

ボクは何気にある場所に目をやった。

それはこのマンションのポスト。

部屋の数だけのポストが並んでる。

自分の家のポストを開けてみると中には何もなかった。
次に隣のリュウちゃん家のも見てみるとこっちも何も無い。

今度はナツキお姉ちゃん家のポストを覗いて見た。

中には一通の封筒。

ボクは手に取り、裏も見た。

「……………え？」

ボクは自分の目を疑った。いくらボクが頭悪いからって少しの字くらいは読めるさ。

これは読み間違いではない。

絶対そう書いてあるんだ…。

“ナツキより”

(…いくら何でも自分に手紙書かないよね？)

ボクが封筒を見つめていると背後から物音がした。

「セイ……くん？」

ナツキお姉ちゃんが変な顔をしてボクを見つめていた。

032 ドアノムコウ

「…これ…どういう事？まさか…自分に手紙なんて書かないよね？」

「…自分で書いたのよ？よく見て！宛名は叔母さんの名前になってるでしょ？ここはわたしの家ではなくて叔母さんの家だもの。」

「……………」

ボクは勝手に封を切り中の手紙を取り出した。

「だめっ！」

ナツキお姉ちゃんはすぐにボクから手紙を奪い取るが、遅かった。手紙はシンプルにこう書かれていた。

“もつすぐ向かいます。”

「…もつすぐ向かいます？…それ…どういう意味？」

「簡単な事よ。わたしが叔母さんの家に向かうって事よ。ここにはいない事になってるし…」

「嘘だっ！外によくいたじゃないか！隠れてる様子もないしっ…」

「…本当よ！信じて！」

ゆっくりと近づいてくるナツキお姉ちゃんが恐くなったボクは後退りをして、走り出した。

「セイくん！」

タッタッタッ…

ボクは階段から上へ上がった。そして家に入りドアを閉め鍵をかけた。

ガチャッ。

「…はあ…はあ…」

ボクが呼吸を整えてるとチャイムがなった。

ピンポーン

「…え!？」

ボクは息を止めた。

ピンポーン

またチャイムになる。

「……………」

ボクはドアにゆっくりと近づきスコープを覗こうとしたらドアの向こうから声が聞こえて来た。

「…リュウちゃん…わたし…ママよ…」

「…え?」

ボクは足を止めた。

「ご飯まだでしょ？ママが作って来たの…リュウちゃんの好きなハンバーグよ…？」

ドアの向こうはリュウちゃんママ。ボクはそこから動けずドアをじっと見つめている。

ガチャッ ガチャッ

「……！」

リュウちゃんのママはドアを開けようとしていた。

ガチャッ ガチャッ

ガチャッ ガチャッ

「…開けてリュウ！…あなたの好きなハンバーグよ…？」

「違うっ！ボクはリュウちゃんじゃない！ボクが好きなモノはハン

バーグじゃなくてスパゲティーだっ！」

「嘘よ！あなたハンバーグが好きだったじゃない！ママの作ったハンバーグが…」

ガチャッ ガチャ

「だからボクはリュウちゃんじゃないって言ってるだろ！」

ガチャ ガチャ

「どうして？どうしてそんな嘘つくのっ…！リュウちゃんはそんな子じゃないでしょ？…ママ怒ったわ…！」

「……？」

ドンッ！

「わっ！」

「開けなさいっ！さもないとこのドアをブチ壊してやるわよっ！」

ドンッ

ドンッ

「……ひっ」

ガチャ ガチャ ガチャ

「開けないさいっ！開けなさいっ！たらっ！ほらっ！早く開けなさい！ただ開けるだけでいいのよっ！ほらっ！このドアを開けなさいっ！ほらっ！早くっ！」

ドンッ ドンッ ドンッ

ガチャ ガチャ！ガチャ！

「…ひっ…！」

ドン！ ドン！ ドン！ ガチャ ガチャ ガチャ

「ホラッ！アケナサイ！アケナサイッテイッテルデショウ！ホラッ
！アケテ！アケテッテイッテルダロオウガ！アケロオオオ」

ドン！ ドン！ドン！ドン

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

ドン！ ドン！ドン！ドン

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

ドン！ ドン！ドン！ドン

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

ボクはただ耳を塞いでいた。

033 イカリノテッケン

「…ちゃん！」

「…セイちゃん！」

「セイちゃんてば」

遠くから聞こえて来る声にボクの視界は黒から白へと変わっていく。

「…ん」

「大丈夫なの！？どうしてこんなトコで寝てるの？大丈夫？」

「…え？…うん」

どうやらボクはあのまま玄関で寝ていたようだ。

「良かった。何ともないみたい。ごめんねママがおそくなったから…今、お客さんも一緒なの…」

「……うん。」

眠い目をこすりながらママの後ろに立っているお客さんを見ると、男の人だった。

「初めまして…君が誠一郎くんだね…？」

「…うん。」

「キミのママとは最近知り合って仲良くさせてもらってるんだ。よろしくね…」

「…あ、どうぞ。コーヒー一杯くらい飲んで帰られては…？」

「…いいの？」

「もちろん！そのつもりでここまで連れて来たんですから…どうぞどうぞ」

「……………」

…なんだか、いつものママじゃなかった。

ボクは悟った。

最近のママの帰りが遅いのはこの男の人と会ってるからだ…と。

男の人はソファに座ると家の中をマジマジと見渡していた。
ボクはコーヒーを用意してるママの隣に立ち、問い掛けた。

「…ねえ、ママ。あの人が好きなの？」

「やつ。もー何言ってるのセイちゃん！」

ママはすごい照れていた。

「どこで知り合ったの？」

「ここで…よ。家にたまたま来たのよ。ほら、リュウちゃんが現れたあと。」

「…え!？」

ボクは嫌な予感がした。

「超常現象に詳しい方なのよ。リュウちゃんの事相談にのってもらったの。」

「オオトモナオキ？」

「あら！？何でわかったの？」

「ママ…前にパソコンで見てたじゃない？でも…か…顔が違う…」

「わざとみたいよ。顔がバレるのは駄目らしくって…でも顔を出さないで信用できないじゃない？だから助手さんの顔を使ってるらしいのね…あ・ごめん。トイレ行ってくる。」

「……………」

ボクは唾を飲み込んだ。

あの…運転手はやはりニセモノで今ここにるのがホンモノ。

まさか…こんなカタチで本物のナオキと会うなんて…。
気付けばママの姿は無かった。

「……………」

「そんなに恐いか？」

その声に反応した時、ナオキの顔が目の前にあった。

「……………」

「初…対面…だな？近くでみるとガタイいいな。そうだな？お前これでも17だしな…くくく。」

「…お前が…リュウちゃんを殺したんだな？」

「…ばか言え。リュウを殺したがつてたのは両親だ。俺はそれを手助けしただけだ。なんでお前に俺を責める義務がある？お前だって望んだクセに。」

「…そういう時もあった…でもまさか本当になるなんて…」

「体はデカくても頭はガキだしな…障害者はつらいねえ…あの二セナツキにも言つとくんだな、俺の邪魔するな！って。このままだとお前のママの命はないぞ。」

「ママは関係ない！」

「何言ってんだ。お前のママの前にひとりの女だぜ。ママが俺にホシたら関係ないワケないだろ？ましてや体の関係を持つたらなおさらだ。それにママはお前の事で疲れ切ってる…。だから俺みたいな男が必要なんだ…俺がママの疲れを癒してやるんだ…体でな…わたしはあなたのココロのスキマをお埋めします。オーホッホッホッ…」

バキッ。

ドサッ。

気付けばボクはナオキの顔を殴っていた。
運悪くその瞬間をママに見られた。

「セイちゃん！なんて事をするのっ！」

「…はぁ…はぁ…」

ママが青ざめた顔でナオキに駆け寄る。

「大丈夫ですか？ナオキさんっ！」

「…はぁ…はぁ…」

ニセナオキは俺の顔を見るとニヤついていた。

ボクは初めて本気で人を殴った。

今までリュウちゃんとケンカをよくしたけれど、自分から手を出すなんて…殴るなんて出来なかった。

けど、今回は違う。

こいつは殴らなくてはいけない人。

絶対悪い奴だってわかってる！

なのに…

なのにどうしてママはボクを変な目で見るの？

「セイちゃん…ママショックよ！まさか初対面の人に暴力ふるうなんて…ナオキさんが優しい人だから良かったけど普通の人だったらセイちゃん…殴り返されてあなたも怪我するトコだったのよ！笑って帰ってくれたけど…」

！

ママはボクに呆れた様に言った。

「…最近、帰りが遅いのもあの男のせいなの？仕事が忙しいって嘘だったの？」

「嘘じゃないわよ！何でそんな事を言うの！」

「…ママ…あの人がリュウちゃんを殺したって言ったら信じる？」

「何言ってるの！あの人は私達を救う為に現れたんじゃない。」

「違う！あいつがリュウちゃんを殺したんだっ！ボクにはわかるっ！」

「セイちゃん！…もういい加減にして！口を開けばリュウちゃんリュウちゃんって…ママ疲れたわ…」

「だってホントなんだモン！他にどう言えがいいの！？」

「…お願いだから…もう二度とリュウちゃんの名前を口にしないでっ！」

ママはあまり怒らないが疲れていたせいか大声でボクに怒鳴り付けた。

ボクはあまりにびっくりして目からは涙が溢れて来た。

だが、ボクはそこで負けるワケには行かなかった。

ママを守る為にはママを納得させなくては…

「…お願いだから信じて…ボクは…ひっく…嘘をついてない！…ひっく…あの男は危険なんだ…ひっく…リュウちゃんは…あの男…」

ひつく…殺されて…ひつく…幽霊に…なった…んだよ…ひつく…」

バシッ！

ママはボクの頬をぶった。

「リュウちゃんの名前は言わないでって言ったでしょ…！分らない子ねっ…！」

「……………」

「…もう話になんない。遅いからさっさと寝なさい！明日も学校でしょ…！」

「…う…ひつく…うう…ひつく…ママも思ってるんでしょ？ひつく…どうせ…ボクなんか…障害者だって！まともな人間じゃないって…ひつく…思ってるんでしょ…ボクなんか生まなきゃ良かったって…！」

「ばっかっ！ママがそんな事いつ言った？私はセイちゃんが元気でいてくれればいいって…それだけでいいのに何でわかってくれないの…！」

「…ひつく…ひつく…おやすみなさい…っく」

ボクはゆっくりと自分の部屋へ向かった。
後ろでママがボクを呼んでるが振り返る元気も無かった。

ボクは一瞬にして無気力になった。

そして部屋に入る。

ボタン。

どんなに堪えようとしても涙は止まらなかった。もうボクには何も信じるものがないと気付いてしまった。

ボクはただ泣くしかなかった。

- 翌朝 -

ボクはママと一言も話さなかった。ママから声を掛けられてもずっと無視していた。

「行つてらっしゃい…気をつけるのよ…」

「……………」

ボクは無言のままドアを開け閉める。

ボタン。

ドアを見ていたがママが開ける気配はなかった。

「……………フンだ！」

ボクはエレベーターへ向かおうと歩きだした。

ガチャッ。

ドアの開く音がした。

ボクはママだと思って振り向いたが開いたのは隣のリュウちゃん家のドアだった。

中にはいつも立っているリュウちゃんママではなくパパだった。

「……………」

するとリュウちゃんのパパは笑顔でこう言った。

「…セイちゃん、わるいがリュウも一緒に学校へ連れてってくれな
いか？」

「…え？」

「おーい、リュウ！早く仕度しないか！」

リュウちゃんのパパは家の中に向かって言った。

すると…

「…うん！セイちゃんこっち来てエ！」

家の中から聞き覚えのある声がした。

これは紛れも無くリュウちゃんの声だった。

「ホラ、呼んでるぞ。リュウが…」

そう言ってリュウちゃんのパパはボクを笑顔で見つめた。

035 ソウシヨク

「セイちゃーん！何やってるのー？早くおいでよ。」

「……………！」

何度聞いてもリュウちゃんの声だった。

「なんで？リュウちゃんはおじさんとおばさんがベランダからポイ捨てして死んだじゃないか……」

「……？何を言ってるリュウは死んでなんかいない……何でおじさんがリュウを殺す必要が……？」

「……セイちゃあああん」

ドタドタドタドタ

家の奥から足音がこつちに向かっている気がしてボクは恐くなって逃げ出した。

「うわあああああつ！」

「おいっセイちゃん！」

タッタッタッタ。

リュウちゃんのパパはボクを呼び止めたが恐くなったボクはそのままエレベーターに乗った。

「……はあ……はあ……」

ゴオオオオオオオオオッ

「……はあ……はあ……」

「おん。」

「…え？」

エレベーターが止まる。上の表示を見ると四階で点滅していた。

そしてドアが開く。

「……！」

ドアの向こうにナツキお姉ちゃんが立っていた。

「…わたしの話を聞いて！セイちゃん…」

「いやだっ！どーせお前も仲間だろ？おかしいと思ったんだ！だつてニセナオキに犯されたつてのに平気な顔してるし…」

「聞いて！確かにわたしは本物のナツキさんではないわ。でもナオキの仲間ではない！それだけは信じて…」

「うわあああああつ」

ボクはニセナツキお姉ちゃんを突き飛ばし階段で下まで一気に降りた。

「……はあ……はあ……わからない……死んでたはずのリユウちゃんが生きてて……ナツキお姉ちゃんも偽物で……本物のナオキは現れて……ママはそのナオキが好きで……はあ……はあ……はあ……頭の悪いボクじゃ……どうしていいのかわからないよ……誰か……だれか助けて！……助けて！」

ボクはバス停へ向かった。

「あーはっはっはっはっ」

⌋
⋮
⌋

「あーはっはっ。こりやおかしいな。セイの奴、ホントにリュウがいると思ってやがる。ただリュウが映っているビデオの音量を上げただけなのに……走って逃げたぜ。」

⌋
⋮
⌋

「おい、まさかまだあいつをリュウだと思ってないだろうな？ いいか？ リュウは死んだんだ。俺達がベランダから落としたんだ」

「何言ってるの！リュウは死んでないわ！」

「死んだよ！俺達が殺した！あいつは毎日「死にたい」って言うってた…笑いながら…わかってるだろ？人を困らせる神経しかなかった…リュウはそういう障害だった。お前だって毎日泣いてたじゃないか…なんでリュウが死んだことを認めない…リュウは…大人になつてはいけなかったんだっ…！」

「……………」

「正直…ホツとしたよ。リュウがいなくなって…生憎、警察には俺達がやったとバレてない。」

「…………ふふ。」

「…………？なあ、俺達は今からまた新しい子供作って新しい生活を始めるんだ。死んだリュウもそれを望んでるはず…」

「…ふふ、あの人の言ったとおりだわ…」

「…誰だ？あの人って…」

「わからない。突然、現れたの…髪の高い女の人…これであな

036 コンラン

バスがやって来た。

ぶふううーん。

キイツ。

そしてバスの扉が開く。

「……………」。

ボクはニセナオキに会うのが恐かったが勇気を出してバスに乗った。ところがいつもいるはずのニセナオキの姿はなく、別の男の人が運転席にいた。

「……………！？」

ボクは運転席をじっくと見つめながら歩いていたので誰かに足を引っ掛けられてコケてしまった。

ドサッ。

「……………！」

「ぎゃーはっはっはっ」

「馬鹿だ、馬鹿！」

「ウーヒッヒッヒッ」

「……………」

ボクはゆっくりと立ち上がり埃を掃う。

「強がっちゃって！ホントは今にも泣きたいんでしょ？ママの胸でね！うふふふふ…」

萌ちゃんは相変わらず包帯だらけでボクに文句を言った。ボクは無視して席に座る。

「あたしを無視する気？アンタみたいのをへソ曲がりって言つものよ！デベソ！」

「うるさい！ボクはデベソじゃないぞ！」

「デベソよ！お前のかあさんデベソ！」

「うるさいっ！」

ベシッ！

ボクは頭に来て萌ちゃんの頭を叩いた。

「いたあい！いたいよ！せんせーい！セイちゃんが…セイちゃんが
萌の頭を…うええええ〜ん」

萌ちゃんが泣きだし、先生がやって来る。

「セイちゃん！あなた男の子でしょう？女の子を泣かしちゃいけません！大丈夫？萌ちゃん…」

「だって！萌ちゃんがボクのママがデベソって…」

「デベソだっていいじゃない…何が嫌なの？もう…包帯撒いてる頭を叩いちゃ誰だって痛いわよ！ホラ謝りなさい！」

「先に言ったのは萌ちゃんだよ！」

「先に叩いたのはセイちゃんでしょ！ホラ！謝りなさい！」

「……………」

「なに黙ってるの！謝るだけでいいのよ！ほらあ！」

「……………」

「もういいわ！……まともな人間ならここで謝るけど……萌ちゃん、痛かったねえ……だけど……もう泣かないで……ね？」

「ひつく……うん……」

先生は優しい顔で萌ちゃんをみていた。

……ボクは面白く無かった。

ただ黙って窓の外を見ていた。

学校に着くと、先生に呼ばれた。

「セイちゃん！」

「…はい？」

「…あなた…みんなワザとやってるでしょ？さっきのバスの中の事、教室でウンコ漏らしたり。あなたリュウちゃんの真似してるつもりなの？」

「違う！ボクは何もしてない！どうして信じてくれないの！？」

「誰があなた達みたいな障害者を信じるってのよ…。仮にセイちゃん以外の人がやったとしても教室でウンコするようなアタマよ！そんなに先生の事が嫌い？…リュウちゃんもそうだった…いつも私を困らせる様な事ばかりを…だから…少し嬉しかった…リュウちゃんが死んでくれて。あなたもそうなってくれれば…先生…嬉しいわ…」

「……………！」

先生は小声で言った後、教室へ向かった。

ボクはトイレへ向かった。

「……………う。」

そして、涙が溢れた。

「…うつ…うつうつ…ひつく…うえっ…あぐっ…うえええっ」

どんなに堪えても次から次へと涙が溢れ、声が洩れてしまう。

「…うつ…くっ…も…う…いやだ…もう…何もかも…リュウちゃんも萌ちゃんも先生もナツキお姉ちゃんもニセナオキも本物のナオキもリュウちゃんのパパとママも…ママも…なにもかも…ひつく…えぐっ…全部いやだあああああ…っ…うえええええええええ…ん…」

ボクはついに大声で泣いた。声がトイレで響く。

「…んふふ。」

鼻で笑う声が聞こえた。

ナツコの.....

037 ホウモンシャ

「セイちゃん…わたしに…手伝わせて…問題が一気に解決するわ…」

「…！？ ホントに？でも本当は全部お前がやったんだろ？」

ボクはナツコにそう言った。

長い髪で顔が見えないがナツコは首を横に振った。

「違う。全部リュウちゃんの仕業よ？あなただつてリュウちゃんがどんな人間かわかって来たはずよ。あなたのしらないところでみんなを困らせていた…それは幽霊になっても変わってないわ…」

「さつき…リュウちゃんの家で声を聞いた…やっぱりあれはニセモノなの？」

「リュウちゃんは確かに死んだわ。それは先生が言った様にあなた以外みんなが望んでいたから。だから私は手伝ってあげたの…リュウちゃんのパパもママも疲れ切っていた。私はほんのちよつと手を差し延べただけ。」

「でもかえって悪化してるじゃないか！幽霊になったリュウちゃんが今はみんなを苦しめてる！」

「そこからはあなた次第よ？私は『リュウちゃんが死んで欲しい』という願いを叶えてあげただけ。その続きをあなたが願えばいいのよ。」

「えっじゃあ…リュウちゃんを天国に行かせてあげて…！成仏させて…」

「……………わかった。」

ナツコはあっという間に姿を消した。

「……………」

ボクはしばらくボツとしていた。

そして考える。

リュウちゃんが成仏したとしても今起きてる現実はずほど変わらない。

それに気付いたボクは自分でどうにかしなくては…という結論に達した。

ウジウジしたって何も始まらないのだ。

ボクは深呼吸し、教室に入った。

ガララ…。

「……………」。

みんなの冷たい視線がまた突き刺さる。

でもボクは気にしないように席に向かった。

そして、めずらしく椅子の上にはウンコがなかった。

ボクは少し嬉しくなり椅子に座ると、みんながクスクスと笑う。

「…？」

ボクはよくわからなかったが、先生が来るのをまっていた。

ガララ…

先生が入って来た。

「みんな、おはようございま……誰？こんな事したのっ！」

先生は入ってくるなり怒鳴り出した。よく見ると教壇の上にウンコがあった。

「……あっ！」

ボクは思わず叫んだ。

先生がこっちを見る。

「またあなたね？セイちゃん！」

「ち・違います！」

先生はズカズカとボクの前にやって来てはビンタをした。

バシッ。

「今度という今度は許さないっ！」

「先生っ！ボクじゃないよぉ」

バシッ。

「…何で…何で嘘つくのっ！…もう…！」

バシッ！

ビシッ！

「先生を馬鹿にしてっ」

先生は涙を流しながらボクを殴っていた。

バシッ

ビシッ

ボクの唇の横が先生の爪によって切れ、血が飛び散る。

「どうしてっ！どうして私を困らせるのっ！？」

ビシッ

バシッ

先生の涙を見たボクはもうどうでもよくなって黙っていた。

どうせ誰もかばってくれないし。

なかなか叩くのを辞めないでボクの意識はもろろつとして来た。

ガララ。

いきなり、教室のドアが開いた。

「……！」

みんなが一気にドアの方を見る。

一人の男が立っていた。

「…あつ。」

ボクは頭がクラクラになりながらも叫んだ。

だってそこに立っていたのはニセナオキだったから。

先生はボクを後ろに隠し笑顔で

「……ナオキさん……今日はどうして来なかったのですか？代わりに他の人が運転したのですよ？」

先生はゆっくりとナオキの方へ歩いて行った。

「……はぁ……はぁ……すみません……具合が悪かったもので……はぁ……はぁ……」

「大丈夫ですか？ホント顔色悪いですよ。」

「……はぁ……はぁ……」

「……ナオキさん？」

「……はぁ……はぁ……」

「…へぐっ！」

突然、先生が奇声を上げた。

「…へぐぐぐぐっ！んぎゅるいううう…」

その瞬間、一気に真つ赤な噴水が先生の首から見えた。

「…へ？」

ドサッ。

先生は首を押さえ倒れ込む。

「…先生！」

038 パニック

「……っうっ！」

「あひゃひゃひゃひゃ！みんな見ろよ！電池の切れかかったオモチ
やだよ。これをこつすると……な」

ニセナオキは手に持っている血のついた鋭いナイフを先生に向け、

ザクッ。

……と、お腹に突き刺した。

「ぐうわっ！」

先生はまた奇声を上げ、体を痙攣させていた。

「……………」。

ボクと教室にいるみんなは黙ったままポカンとしていた。

「あひゃひゃひゃ。見たか？見ただろ？こつだよっ！こつ…！」

ザクツ　　ザクツ

「…ううううっ」

ニセナオキは手を降ろしては上げ、降ろしてはまた上げた。
その度に先生の体は小刻みに揺れ、着ている服は返り血で次第に赤く染まって行った。

「……あは」

「…あはははは」

突然、クラスの一人が笑い出した。しかも、楽しそうに手を叩いてだ。

「あひゃひゃ…面白いだろー？今、笑ったキミこっちに来てごらん。キミにもやらせてあげよう。」

「うん！あはは…」

すると、その子は立ち上がりニセナオキの前までトコトコと歩み寄った。ニセナオキはニコニコしながらその子に血の付いたナイフをゆつくりと渡す。

「……………」

「いいか、こつやって持ってこつするんだよっ！」

ニセナオキはすばやくその子の首にナイフを向け深く突き刺した。

ズブ。

「…ひぐっ」

その子は目を大きく開き、舌が飛び出るくらい口を開けていた。
ナイフが喉を貫通している為声が出ない。

「あひゃひゃひゃ」

ニセナオキは楽しそうに笑いナイフを引き抜いた。

ブシュシュシュ

大量の血が噴き出した。

「うわああああん」

一人の子が叫ぶ。その声にみんなビクツとした。

ニセナオキが顔を強張らせ、

「うわぁ…じゃねえんだよ！静かにしてくれないか？」

タツタツタツ。

ザクツ ザクツ

「うわぁぁぁ……あ」

ドサッ。

叫んだ子は刺され倒れ込んだ。

「あひゃひゃひゃひゃひゃ、この子も電池切れ！さあ！次はどの子かなあ？」

「…ひいつ。」

「うう」

ガタタツ。

「わあああつ」

一人の子が席を立ち廊下に出ようとした。

「…こらっ待てっ」

だが、身体が不自由な為動きが鈍くてすぐに捕まられる。

「うわあああっ！たすけてえ！」

ザクッ。

「…ああああっ」

「…お前はめった刺した。」

ニセナオキはその子を力強く寝かせ、その上から思い切り素早く何回もナイフを上下に動かした。

ザクッ。サクッ。ドスッ。ざぐざぐざぐざぐざぐざぐざぐざぐざぐドスッ。サクッ。ザグッ。ぐさぐさぐさぐさぐさぐさぐさ

「う……あ……う……」

そしてその子は上を見たまま動かなくなった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……次はどいつだ？」

「……………」。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ガタッ

ドアに一番近い子が立ち上がりドアから逃げようとした。

ガラ……。

「たすけっ……て……」

ドサッ。

ニセナオキが投げたナイフが背中に命中し、ドアを開け切る前に倒れた。

「あひゃひゃひゃ。今のウマカッタね！」

「……………！」

「……………っ。」

「……………ひっ」

「……………っえ」

みんな今にも泣きだしそうだった。もちろんボクも。

039 パニック2

「ほらあ、泣きたいヤツいるかあ？少しでも泣いて見ろ…死・ぬ・
ぜ。」

「…ひいつく！」

「…うう！」

声が洩れそうになった子はみんな口を押さえていた。

「…うっ」

「…ひい」

「…んん！」

「…あひゃひゃひゃ。みんな震えてるねえ〜ブルブルと…ブルブル
と…ブルルルルル」

ニセナオキは唇を空気で震わせ何故か回転していた。

「ひゃっほー！んー！サイコーだぁ！気持ちいいぞおおっ」

そして誰もいない場所にナイフを振り飾っていた。

シュッ シュッ シュッ

シャッ シャッ シャッ

「ヒャッホオ！」

足を地面でバタバタさせ、まるで音楽に合わせて踊ってるかの様だった。

「萌ちゃあああゝん」

ニセナオキは気色悪い声で萌ちゃんの顔に近づく。

「キミ、いつもセイちゃんをいじめていたよね？バスの中とか教室のウンコ事件とかさあゝ。セイちゃんが俺に言ってたよお。萌ちゃんが嫌いだってさ！殺して欲しいってさ！」

萌ちゃんはその言葉を聞いてボクの方を見た。

ボクは慌てて否定する。

「違う！ボク何も…」

「…アンタ…やっぱりクズだわ！アンタがいるとみんな死ぬわ！」

萌ちゃんはボクをすごく睨んでいた。

「ほらあ またあ」

「…ん！」

ニセナオキは萌ちゃんの唇をつまみ引つ張った。

「…もうゝ悪いお口ちゃんでちゅねゝ」

ニセナオキはあつという間に摘んだ唇をナイフで切り取る。

「んぎやああつふ！」

痛みで叫ぼうとした萌ちゃんの口を塞ぎ、

「叫び声は…禁物」

ニセナオキは靴を脱ぎ靴下を脱いでは萌ちゃんの口に詰め込んだ。

「…ふぐぐ。」

そして、萌ちゃんの顔の前にお尻を突き出した。

「萌ちゃんあああん、俺のウンコたべるう〜?」

「んんん!」

必死に首を横に振る萌ちゃん。

「あひゃひゃひゃ。冗談だよお〜ん!」

笑いながらニセナオキは萌ちゃんを抱き上げ、教壇にあるウンコに顔を思い切りぶつけた。

ゴンッ！

鈍い音が教室に響く。

「あ・ソレ もう一回」

ゴンッ。

ゴンッ。

ゴンッ。

「んばあああ！」

萌ちゃんの鼻は変形し、額から血が流れ、顔はウンコまみれになっていた。

前の怪我で巻いていた包帯も血で真っ赤に滲んでいた。

「あひゃひゃひゃ。セイちゃん…良かったね！これで誰もいじめる人いなくなるよぉ」

「……あ。」

ボクは言葉が出なかった。

「これも電池切れ。」

ドサッ。

萌ちゃんをゴミの様に放り投げたニセナオキは小走りにボクの隣に座ってる子の頭を掴み出す。

ガシッ。

「うわっ。」

無理矢理引っ張り、景色が綺麗に見える窓ガラスへ力まかせに投げ付ける。

ゴォン。

ピシッ。

衝動でガラスにヒビが入った。

「…もういいかい！」

ゴン。

ガシヤアアアアアーン

ガラスは勢いよく割れ、近くの席に座ってた男の子の目に無数の破片が入る。

「ぎゃあああ！」

「うわあああっ！」

「うえええ〜ん！」

残りの生徒達が叫び声を上げ、パニック状態になった。

「はい、電池切れ。」

ニセナオキは掴んでたその子を窓から放り投げた。

「……ひっ」

ボクはその光景を見てリュウちゃんが『ポイ捨て』された事を思い

出した。

040 パニック3

ガララ…

ガラッ。

ガタタッ。

三人の生徒が逃げようと一斉に立ち上がった。

「待てっコラ！」

ザクッ。

「うわああああ」

ドスッ。

「うつ」

ニセナオキは華麗にナイフを振り回す。

シュッ
…

ぶしゅううう
…

首を切られた子の血がボクの顔にかかる。

「うわっ」

「あひゃひゃひゃ…あと5人だ…」

「何これ？首から血が…こんなに…たくさ…ん…はあ…はあ…」

「……！」

「はあ…はあ…た…すけ………」

どゅっ。

「うえええええええん」

一人の子が泣き出す。

「声を上げるなって言ってるだろ？」

ゴキッ。

ニセナオキは泣いてるその子の首を捻った。

どろっ。

「うわああ
」

また別の子が逃げ出そうと歩き出すが、床にまみれている血で滑る。

「…あっ！
」

ゴンッ。

ロッカーの角に頭をぶつけ倒れ込んだ。

「あゆむくんっ！
」

「……………」

だが、あゆむくんはあのまま動かなかった。

「あひゃひゃひゃ、さすが障害者！滅多な死に方しないねえ……」

「この野郎！」

ニセナオキの背後に座っていた子が立ち上がり、ニセナオキに向かって殴り掛かって来た。

だが、ニセナオキはとも簡単にその攻撃を避け、キックをした。

「あちよ〜」

ドガッ

「……うわっ！」

割れた窓ガラスへ体勢を崩す。

ニセナオキはスキをみてその子の両足を持ち上げる。

「うわああああ」

その子そのまま落ちて行つた。

「あとはお前とお前だ！」

そう言つてボクともう一人の子を指差した。

「……………！」

ボクはもう一人の子の手を引っ張り、

「一緒に逃げよう！」

「…うん…」

ボクとその子は同時にドアに向かって走り出した。

ダッ！

「…待てっ！逃がさんぞ！うらぁ！」

ニセナオキは素早く持つてるナイフを振り落とす。

ちょうど、ボクとその子の間に。

トスッ。

「……！」

「わあああつ」

友達は手首から切断され、ボクは残された手を握
ったままだった。

「ぎゃっ！」

「セイちゃん…ボクの手が…手が…うう…」

ボトボトと手首から血が流れます。一瞬にしてその子の背後にニセ
ナオキは立ち、

「…可哀相に…だから…死ね…」

ザクッ

「……………」

「……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

「……な……なんで……みんなを……」

ボクは震える声で聞いた。

「……それが……お前の望みだから……さ……」

「違う！ボクはみんな死んで欲しいなんて……嫌いだけど、死んでくれなんて……」

「リュウが成仏して欲しいんだろ？」

「……うん……」

「お前が苦しめばリュウは成仏する……今度はお前のママの番だ……」

「……え！？」

ニセナオキは窓に向かって走りだし、そのまま消えた。

ボクはすぐに窓を見ると下にはニセナオキとニセナオキによって落とされた生徒が横たわっていた。

「……………どういう事？ママって……」

ピンポーン

「……はあゝい。」

ガチャッ。

「お久しぶり。」

「……………どうも」

家の前にはリュウちゃんのママが笑顔で立っていた。

.....
[.]

041 キンパク

タツタツタツ

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

タツタツタツ

ボクは無我夢中で家に向かって走っていた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ニセナオキの最期の言葉。

「次はお前のママの番だ」

今度はママを狙う気だ…早く…早く家に着かなきゃ！早く！早く…！

タッタタッ

マンションが見えた。

ボクはすかさずエレベーターに向かう。

ガダン。

ゴオオオオオオオオ〜ン

「…はあ…はあ…はあ」

エレベーターが6階に着くとボクはドアをこじ開ける様にして飛び出た。

「……………くっ」

タツタツタツタツ

ガチャッ

家のドアを開けるとすぐにドアを開け中に入った。

「…ママ！」

…ダダダダ…

「ママ！」

ダダダ

ガチャッ

「…ママ！」

ダダダダ

「…？」

どこに探してもママの姿はない。

残りはボクの部屋だけだった。

「……………」。

ガチャッ

「……………」！

ママはボクのベッドで寝ていた。

目と口は半開き、服は血が広がった様に真っ赤に染まっていた。

「ママー！」

ボクはママに駆け寄る。

「ママ！起きて！ねえ！起きて！」

「その人ママじゃない…ママはわたしよ！」

ニセナオキと同じ様に鋭いナイフを持ったリュウちゃんのママが立っていた。

「……………」

「どうしてわかってくれないのっ！わたしがママだって言ってるのに…もう…どうして…どうしてなのっ！」

「…まさか…おばさんがママを？ママを殺したの？」

リュウちゃんのママは横の壁を思いつき蹴飛ばす。

ゴンッ！

ボクはびっくりして声が出なかった。

「…この女はね！わたしからあなたを奪ったのよ！だから罰を与えてやったの！あなただってそう望んでいたでしょ？この女から解放されたいって…」

「違う！ボクのママはお前じゃない！この人だっ！リュウちゃんだけじゃなくボクのママまで殺しやがって！ヒトゴロシ！」

ボクは涙を流しながら訴えた。

それを聞いたリュウちゃんのママは突然、叫び出した。

「いやあああああああああゝっ」

ボクはびっくりして後ずさる。

「あああああああああああああ……お前までわたしを裏切るのかああああ……ひiiiiiiiiiii」

するとリュウちゃんのママは持ってたナイフを上にあげ、今にもボクを刺す体勢に入る。

「ああああああ……もう駄目よお……良かれと思ってやってるのに誰も認めてくれない信じてくれない……あんたを殺してわたしも……わたしも死ぬううう」

リュウちゃんのママはボクに向かって走ってくる。

「……あ……」

ボクはもう動く事は出来なかった。

「逃げてっ！」

誰かの声が聞こえた瞬間、ボクの身体は乱暴に倒された。

「わっ」

ドサッ

「……………」

「……お姉ちゃん！」

ボクをかばってくれたのはニセナツキお姉ちゃんだった。

お姉ちゃんの脇腹にナイフが突き刺さっていた。

「お姉ちゃん！」

ボクは大声で叫ぶ。

リュウちゃんのママは突然現れた女性にびっくりしていた。

「は…やく…逃げて…逃げるの…ごほっ」

「…でもっ」

「いいから…ホラ！早く…早く逃げて…」

「う…うん！」

ボクはドアの入口に向かって走り出したが、リュウちゃんのママの方が一足早くドアに着きドアを閉めた。

「逃がさないわ」

ボクは周りを見渡した逃げ道は部屋の窓しかなかった。

042 シノビヨルヒト

ボクは窓に近づく。

この窓からは隣のリュウちゃん家のベランダが見える。

「…もう逃げられないわよ…リュウ！わたしと一緒に死ぬのよ…！」

リュウちゃんママはギリギリと歩み寄る。

ボクは窓を開けた。

ガララ…

よく見ると窓の外側の壁に小さな地面の様なものがある。
これを辿れば隣のリュウちゃん家のベランダに着く。

だが、一歩間違えれば確実にここ6階から落ちて死ぬだろう。

「……………」

選択の余地などないのでボクは窓をまたがり、外側に出た。

「あ・待ちなさい！」

リュウちゃんのママはボクを掴もうと手を延ばして来た。

ボクはそれをよける様に壁にくっついたまま横歩きをする。

視界はいつも見慣れてるはずの高所だが、状況が違う為すごく恐い。

「危ない！落ちるわよ！こっちに戻って来なさい！」

ひゅっうう。

こんな時に限って風が強い。

「……はぁ……はぁ……」

「りゅう！危ないって言ってるでしょっ！？」

ボクは焦りながらも慎重に横歩きをした。

ふと、横を見るとリュウちゃんのママも同じ様に横歩きをして追い掛けてくる。

ひゅっうっうっう

「…待ちなさい！リュウ！」

「ボクはリュウちゃんじゃない！」

ひゅっうっうっう

隣のベランダが徐々に近づき、ボクはジャンプをした。

「えいつ」

ボクの身体は宙に浮き、何とか着地出来た。

「…はあ…はあ…はあ…」

ボクはベランダの窓を開け中に入り、鍵を掛けた。

窓の向こうでリュウちゃんのママがこっちに向かっている姿が見える。

「…はあ…はあ…」

ふと、この部屋に変な臭いがすることに気付き、周りを見渡した。

そこにはリュウちゃんが笑顔で立っていた。

「リュウちゃん？」

「ずっとボクをリュウちゃんだと思ってた？」

「…え？」

「んふふ。」

嫌いな鼻笑いが聞こえる。

すると、リュウちゃんはみるみると大きくなり、髪が一気に伸びたかと思えば見覚えのある姿になった。

ナツコである。

「最初からリュウの幽霊なんていないわよ。全部…わたしよ…んふふ。」

「お前が？」

「…そうよ…リュウは幽霊なんかになってないわ…あんなバカが幽霊になると思う…？」

「…お前は…幽霊なの…？」

「…さあ…」

ドン。

背後から大きな音がした。

次にガラスの割れる音がした。

ガシヤアアアアアーン

リュウちゃんのママが体当たりして割ったのだ。

「リュウウウー！リュウウウウー！」

「うわっ」

ボクはびっくりする暇もなく両肩を掴まれた。

ガシッ！

「一緒に死のう……」

「いやだ！リュウちゃんはとくに死んだ！お前達が殺したんじゃないか！」

ボクは突き放し、走り出そうとしたら足を滑らせ地面に倒れ込んだ。

ドサッ

ベチャッ

そして生温い感触が全身に伝わる。

「何コレ」

よく見ると地面は真っ赤に染まっていた。

「ひっ……」

血をたどると奥の方にリュウちゃんのパパが倒れていた。

目は半開きにこっち見ている。

「……お……じさん？」

「この男も変な事いうの……リュウは死んだって……目の前にいるのに……死んだって言うの！邪魔するから殺したわ……」

リュウちゃんのパパは無表情でボクを見下ろしていた。

「……………」

そしてゆっくりとボクの首に手を近づけ、力を入れ始めた。

…ぐぐぐぐぐ…

「…………んっ」

ぐぐぐぐぐぐ

「んんんっ」

ボクは徐々に呼吸困難になって行く。

体力は既に限界なので反抗する力も無かった。

ぐぐぐぐぐぐ

「……ん」

視界がぼやけ意識が無くなり掛けた。

その瞬間、リユウちゃんのママの姿は消え、別の女性の顔が現れた。

「キミ！大丈夫？」

「ウオッホ！ゴッホ！ゴホゴホ……！」

咳込むボクの身体を起こしその女性は口を開く。

「とにかく逃げるのよ……」

「……ゴホッ……！？」

その女性はボクの体を支え、歩き出した。

043 ナツキ

ボクは突然現れたお姉ちゃんにあるホテルの一室に連れてこられた。

「中に入って」

「…うん…」

ボクは言われるままゆっくりと部屋に入る。部屋の中には子供がベッドで眠っていた。

「……………」

「そこに座ってて…ジュースでも持ってくるから…」

ボクはゆっくりとソファに座り込む。

ゆっくりと部屋を見渡す。部屋の様子からして今日チェックインしたようだ。

ボクは女の人をジッと見つめた。彼女はボクの視線に気づき、

「あ・ごめん…わたしの名前まだ言っていなかったよね？」

「ナツキお姉ちゃんでしょ？本物の…」

ボクの言葉に彼女は頷いた。

「もう一人のナツキお姉ちゃんはどうなったの？」

ナツキお姉ちゃんはボクにジュースを差し出し口を開く。

「…死んだわ…彼女はわたしの事件を担当した刑事さんの妹なの。ナオキを食い止めたと言って言ったら喜んで協力してくれてね。でもこんな結果になるなんて…」

ナツキお姉ちゃんはテレビをつける。

テレビではボクの学校で起きた事件が臨時ニュースで報道されてた。

犯人は『覚せい剤常習犯のバスの運転手』。

「結局…止められなかったか……」

ナツキお姉ちゃんはタバコを取りだし火をつけた。

ボクはそれを見て言う。

「タバコは身体に悪いよ？ママも昔は吸ってたけどやめたんだ…」

「あ、ごめん。でも吸わないともっとイライラするの。」

「……………う。」

ボクは大粒の涙を流していた。

それに気付いたナツキお姉ちゃんはびっくりする。

「…どうしたの？」

「ママ…死んじゃった…ママが…ひつく…ボク…ひとりに…
なっちゃった…ひつく…うわあああん…」

「……………」

お姉ちゃんはボクをやさしく抱きしめた。

その温もりが心地良かったが、今のボクにはママの温もりを思い出
してしまふほど辛いものだった。

ボクはずっと泣いた。

涙が枯れるまで。

「ひつく…ボク…どうなっちゃうんだろ…ひつく…施設に行くハメになるのかな…？」

「……………かも知れないわね……………」

「しょうがないか…ママは死んだし…親戚のおじさんおばさんはボクを絶対嫌がるし……………」

「だったらお姉ちゃんのトコ来る…？」

「……………え？」

「わたしは構わないわよ？」

ボクは一瞬、ものすごく喜んだ。

だが、首を横に振る。

「ありがとう。でも迷惑かけられない。自分で出来る事は自分でしたいし……」

「そう？仕方ないわね」

「ーそれよりベッドに寝ているのはお姉ちゃんの子供……？」

「……ええ、そうよ」

「結婚してるの？」

「……ううん……シングルマザーよ？」

「パパは誰？」

ナツキお姉ちゃんは何も言わずニコリと笑った。

「……………」

ボクはその日ホテルに泊まり翌日、家に帰った。

ボクの家で起きた事件もテレビやマスコミに大きく取り上げられた。

犯人であるリュウちゃんのママは何故かリュウちゃんのお気に入りだった公園の噴水場で水死体で発見された。

…原因不明の溺死だったらしい。

そしてボクは結局、施設に預けられる事になった。

一体、ナツコやナオキって何だろう？

どんなに考えてもボクにはわかりそうもない。

知ってるのはボクとナツキお姉ちゃんだけ。

あの出来事すら、ボクの幻想だったのでは？
と、思ってしまう。

エピソード

そんなある日の事。

「脱走していた女が見つかって戻って来るらしい。」

「…見つかったのか？今回は時間かかったなあ」

施設の先生達の会話が聞こえる。

「脱走？」

ボクが呟くと、先生はボクを見た。

「そうか、誠一郎くんは知らないんだよね？よくここを脱走する女の人がいてね。…確か、病院で飛び降り自殺未遂を起こして命は助かったんだけど、頭がヤラれちゃって…それ以来、ずっとここに。」

「…ふん。」

「おっ…来た来た。おかえりいいい」

先生は奥からやって来た女の人の元へ。

「……あれ？」

ボクは目を凝らして、女の人を見た。

「……お姉ちゃん？」

そこにいるのは……あの時、ボクをホテルへ連れて行った人。

「あれ？何で知ってるの？」

もう一人の先生が言う。

「この前……会ったんだもん。お姉ちゃんも……障害者なの？」

「ああ、障害者だ。虚言癖もあるから彼女が言った事は信じない方がいい。」

「……え？……あ……赤ちゃんは……？子供いなかった？」

「子供はいない。だが、脱走する度、何処かから赤ん坊をさらって自分の子供だと言う。」

「…え？…なんで？…意味がわからない…」

ボクはお姉ちゃんの元へ駆け寄った。

「お姉ちゃん！ボクだよ？覚えてる？」

ナツキお姉ちゃんはボクを見て微笑む。

「あらら。先日はごーも。」

「やっぱりナツキお姉ちゃんだよね？」

「そうよ？わたしはナツキよ？」

「でも…なんか…」

「…おかしい…」

「誠一郎くん！残念ながら彼女の名前はナツキじゃないんだよ？」

「え？だってナツキってこの前…」

「会った事あるのかい？…じゃあ、よく見といて。」

先生は笑うとナツキお姉ちゃんに向かって

「久しぶり、サチコちゃん。」

「あら？ひさしぶり。わたしの事覚えていてくれたんだあ？」

「何処に行ってたんだい？ミチコ！」

「ごめんなさい。友達と映画に行ったらこんな時間に…怒ってる？」

ナツコお姉ちゃんは先生の言葉に合わせ、全然違う事を言っていた。

「どういう事？」

ボクの問いかけに先生は言う。

「彼女は人に合わせて嘘の返事をいう障害者なんだ。本当の名前は『ナオミ』だ。」

「…ナ…ナオミ？…」

ボクが叫ぶと、お姉ちゃんはボクを見て

「そう！わたしはナオミ！宜しくね！」

と、返事をした。

「……………」

ボクは言葉に詰まった。

じゃあ…

あれはなんだったんだ？

何故、彼女はあの場所においてボクを助けたの？

「……………」

そうか。

ナオキの仕業か。

彼女をナツキお姉ちゃんと思わせて…まだボクを狙ってる？

それしか考えられない。

「誠一郎くん！そろそろ寝る時間だよ？部屋に戻ろう。」

「…先生…ボク…殺されちゃう！」

「突然、何を言ってるんだい？ここは施設だよ？そんな事あるはずかないっ」

「本当なんですっ！ボクはナオキって奴に命を狙われてますっ！」

「ナオキ？誰だねそれは？キミは何か怖い夢でも見たんじゃないのか？」

「違う！本当なんです！先生！ボクを助けて！」

「落ち着きなさい！とにかく消灯時間だ。ベッドへ行こう！」

「やだっ！殺されちゃうのにベッドで寝てられないよ！」

「落ち着きなさい！誠一郎くん！」

「やだっ！」

だが、ボクは強引に先生に引つ張られ自分の部屋へ連れて来られた。

「さっ、寝なさい」

「やだっ」

先生は引き出しから注射器を出す。

「良い子にするんだっ!？」

「はあっ…まさか?…はっ…お前も仲間だな?ニセナオキみたいに
っ」

「何を言ってるんだ?落ち着かないなら打つぞ?」

「いやだっ!ボクは騙されないぞっ!」

「いい加減にしないかっ」

「……………はあっ…はあっ」

先生はボクを怖い目で見る。

そしてふと気付くのだ。

先生の後ろにナツキ…いやナオミお姉ちゃんがいる事に…。

「……………」

「よしっ…静かになっ たな？ 良い子だ…」

ガンッ

「へぐっ…」

先生はお姉ちゃんに鈍器なようなもので殴られ地面に倒れ込む。

ドサッ。

「……………はあっ…はあっ」

ナオミお姉ちゃんはボクをゆっくり見つめる。

「あ…ありがとう。また助けてくれたんだね？」

「……………そうね。あなたを助ける為だもの。」

「…とにかく逃げなきゃ」

「…その必要はない。」

「ーえ？」

彼女は笑うと、

先生を殴った鈍器を持ち上げ、ボクに振りかざした。

「え？」

ゴンッ。

「…これもナオキ様のため…」

… e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256b/>

Lon ely Plan et

2010年10月19日22時16分発行